は止めるという結論に至っているのだ。こうして、耕作放棄地が更に増えることになるのだろう。これを踏まえると、農地の継承は、家族での継承以外の方法を考える必要があることが分かる。これに関して、移住者で農業を営むＳＮ氏、BK 氏、NT 氏は次のように語る。

自分の財産がここにはないので、ご先祖様の土地を守らなきゃみたいなものはない。（ＳＮ氏インタビューより）

大井沢に生まれ育った人の若い人で中々農業って人がいないよね。だとすると、やっぱりよそから総いうのに興味がある人を呼んできて人を組織のね、人を入れてよそから人を入れて維持していくしかもう集落が残っていく方法っていうのはないかもしれないね。（ＢＫ氏インタビューより）

農地の継承は、今その大井沢の中で考えると限界集落に近い。もう限界集落なんだけど、そこで伝承する人もいない。だったら人を呼ばないといけない。呼ぶためにできることを移住者が率先して手本を見せていかないと帰ってくる人もいないし、そこで親から受け継ぐにしても受け継がないにしても何かきっかけを作ることができればいいかなっていう部分で。まぁ農地をそのままね、こっちが継承させて頂けるのであればそれはそれで今後の大井沢の発展と西川町の発展のためにやっていけるのではないかという考えを持ってます。（ＮＴ氏インタビューより）

農業関係の移住者の場合、代々引き継いでいる農地がないため、土地を守らないといけないという事はないことが分かる。また、ＮＴ氏は、今の大井沢の現状を踏まえた上で、移住者が率先して大井沢に人を呼び込むようにしていかないといけないと感じている。そして、農地の継承において移住者の存在はなくてはならない存在だという事が分かった。

こうした耕作放棄地の増加を受けて、西川町農業委員会でも対策が進んでいるようである。これについて、ＢＴ氏は次のように語る。

耕作放棄地を無くすために農業委員があった。その下に新たに農地最適化推進委員が加わり、農業委員と一緒に農地の耕作放棄地とかを無くすために新たに設けた。だから、色んな大井沢全体の農地、町から図面をもらった中で今どの位の放棄地があるかと、そういう風なことも大井沢だけでなくて町全体の地区の担当の人が図面を見て図におろして町の方に提出しているはずだ。それを見ると大体、耕作放棄地がどれくらいあるかって把握してると思うな。（ＢＴ氏のインタビューより）

また、西川町の農地は、土地改良区に設定され、土地改良事業が行われている。しかし、それによって維持管理等の費用が発生し、そのことが課題になっている。これについて、ＢＴ氏は次のように語る。

大井沢は土地改良区に入っている。これの良いところっていうのは、大きい工事をするときに何億ってかかるが土地改良区に入ってある程度のお金で出来る。ただ、維持管理とかで賦課金ができるのよ。（ＢＴ氏インタビューより）

土地改良区に入っていることでメリットもある分、お金を払うことが重荷となる。つまり、土地改良区を維持していくためには農地を持っている人から金銭徴収をする必要があるという事である。土地改良区に入っている地域の農地を持っている場合、たとえ地区外に住んでいるとしても、賦課金を払わなければならない。

だから、親が亡くなって代が代わっている人はざらにいるわけだ。そういう息子さんがなんで、こんなの払わなくちゃいけないのって、文句言うんだけど、そんな事言われても自分らが決めてるわけじゃないから。

（ＢＴ氏インタビューより）

一方で、大井沢から離れた元住民からは、何故払わなくてはいけないのかという声もあるようだ。

土地改良区っていう法律があるんだけども、それが中々難しくて簡単には脱退できないんだ。個人的に脱退するってことできないもんな。（ＢＴ氏インタビューより）

また土地改良区は簡単に脱退することは難しい。そして、個人で脱退することが出来ないことが分かった。農地を維持していくために、土地改良区に入っていることで発生する金銭負担が強いられている。

田んぼ何にも関係ない人も、水…用排水利用ってことで１人 4000 円徴収されるよ。大井沢にいれば。土地改良区に入っていれば。農地がある人も払う。外部から来た人も払う。（BT 氏インタビューより）

大井沢では、土地改良区に入っていることで金銭負担があることが分かった。また、土地改良区の金銭徴収は農業関係者のみならず、農地を所持している人も払わなければいけない。つまり、農地の継承において継承者は継承した時点で金銭負担が強いられる。このことを非農業関係者の大井沢住民はどれほど認識しているだろうか。大井沢住民全体で認識と共有をする必要がある。

ここまでをまとめると、家族単位での農地継承が躊躇される一方で、農地は持っているだけで土地改良に関わる賦課金が課せられ、負の財産と化す。こうしたなかで、耕作放棄地が増加しているのだ。この耕作放棄地の対策も見据え設立されたのが、大井沢農作業受託組合である。つまり、法人化することで、家族ではなく組織・地域で農地を継承することを目指したものと言えるだろう。これは、耕作放棄地が増加する現在、極めて重要な意義を持つ組織であると考える。これについて、受託組合員のＢＫは次のように話す。

自分たちで耕作できなくなったところを受託組合に頼むっていう話になる。農地の受け皿として受託組合がある。耕地を守るっていうかね維持していかないと特に中山間地っていうのは耕作放棄地になってしまうと人が住めなくなっちゃうんですよね。そういう意味ではそこまでね、考えてくれてる人がどれだけいるかだよね。でもおそらく大井沢地区にとってかなり重要な組織にはなるんだとは思いますね。重要性に気付いている人がどれだけいるか。（ＢＫ氏によるインタビュー）

ここからは、既に農地を所持していながらも耕作出来ない人の多くが、農地を大井沢農作業受託組合に預けることがあることが分かった。農地の維持や管理、そして耕作放棄地抑制の役割を担うなど大井沢にとって受託組合の存在はとても重要な存在である。しかし、受託組合の課題をＢＹ氏はこう語る。

受託組合の引継ぎが難しい課題だ。今、受託組合で働いている人がそのまま引き継いでくれるかわからない。先の見通しができる人を育てていきたいと思っている。（ＢＹ氏インタビューより）

また、大井沢農作業受託組合で働く女性ＪＪ氏は次のように語る。

若い人がいないっていうことが一番問題だべ。女の人でもよ、男の人もだんだん少なくなってるけど、女の人もよ、やっぱり少なくなってるんだもん。高齢化が一番の問題だべな。（ＪＪ氏インタビューより）

つまり、家族単位での農地の継承が難しくなっている大井沢の主たる農地の継承（担い手）となっている大井沢農作業受託組合も、既に担い手不足に陥っているのだ。担い手不足だから活用しきれていない

女性の力をもっと活用すること、そしてＵターンやＩターンも含めた外部の人材を活用すること、特に若者を中心に意欲的に呼び込めるようにすることが大事だと考える。その中で大井沢で儲かる農業を考える中核的な農業従事者が必要で、育成することが重要である。大井沢農作業受託組合では、男性、女性共に高齢化が進んでおり、若者が少なく担い手不足である。だからこそ、こうした内外の力をもっと活用することが不可欠なのである。これに関連して、大井沢農作業受託組合のＢＹ氏はこう語る。

農業をやりに来た人に対して、存分に力を発揮できるようにしていきたいと思っている。ここの、特産である山菜とかを売りたいと思っている。そこで、セールに関しては頼りたいと思っている。セールスは地元の人だとダメなのよ。いいところはわかっているんだけど売り出すのが下手なのよ。そこを地元住民と移住者でうまく融合していきたい。（ＢＹ氏インタビューより）

大井沢で今後農地や農業を維持、継続していくためには地元住民の農業関係者だけでは厳しいという認識を、地元住民の農業関係者自身が抱いていることが分かる。特に、販売面では外部の視点が必要であるというのだ。

では、期待のかかる移住者自身は、大井沢において農業を行うことについて、また、農地を維持することについてどのように考えているのであろうか。現在、大井沢農作業受託組合で研修中の移住者ＮＴ氏は次のように語る。

今の大井沢で考えると限界集落に近い。そこで、伝承する人もいない。呼ぶためにできることを移住者が率先して手本を見せていかないと帰ってくる人もいない。親から受け継ぐ受け継がないにしても何かきっかけを作ることができればいいかなっていう。こっちが継承させて頂けるのであれば今後の大井沢と西川町の発展のためにやっていけるのではないか。（ＮＴ氏インタビューより）

また、農業関係の移住者ＳＮ氏はこう語る。

大井沢が好きだし、大井沢でこれからもずっと生活したいから生活している中で、農地が荒れていけば見映えや居住環境も悪くなるから何とかしなきゃいけない。できる人も減っている中で自分もその役割を担っていく１人。（ＳＮ氏インタビューより）

ここからは、農業に携わる移住者にも大井沢の農地を守っていくことへの責任があることが分かる。というのも、耕作放棄地の増加は、移住者か地元出身かに関わらず、地域全体に負の影響を及ぼすからだ。これに関連して、ＢＴ氏（地元住民）やＳＮ氏（移住者）はこう語る。

農業が出来なくなってしまって、農地を放棄してしまった人は、自分は関係ないと思っているけど、周りの住民には被害と迷惑が掛かっている。（ＢＴ氏インタビューより）

見映えも悪いし、獣と人との境がどんどんなくなってる。まぁ今でさえだいぶ近いけれども。（ＳＮ氏インタビューより）

耕作放棄地が増えることは住民の居住環境にも影響を及ぼすのである。耕作放棄地の増加は、農業をする・しない、あるいは地元住民か移住者、そうした区別と関係なく、大井沢に住む全ての人に影響を与えるものである。また、この問題は、家族単位で考えるだけでも、単に大井沢農作業受託組合に農地を託すだけでも解決するものではない。大井沢区全体の問題として、どのように農地を継承するのか、どの農地を継承しどの農地を継承しないのか、継承する主体が持続的にその農地で農作業を行っていくために、

区全体として何ができるのか、何をするべきなのか。こうしたことを真摯に考える必要があるのだ。

４．５．６．農作業における女性の役割

さて、人口減少と高齢化が進み担い手の不足が懸念される状況においては、住民全体の力を結集することが必要となっている。このことは、伝統的には男性が主たる担い手であり地域や農業の運営主体とされてきた山村部においても同様であり、女性に力をどのように発揮してもらえるかが重要な課題となってくる。大井沢においても、もちろん農業を行う上で女性の力が欠かせない。実際、大井沢農作業受託組合では女性がパートとして働いているし、家族経営の場合も様々な形で女性が農業等に従事している。そこでこの項では、農業において女性は具体的にどのような役割を担っているのかを明らかにしたい。

家族経営で農業を行なっているKK氏の妻はこう語る。

> 個人的に働くとなると、やっぱり皆全般草刈りからもううなり方から全部するんだ。細かい仕事はこうやって出来るときは女の人だね。（KK氏の妻インタビューより）

これに関連して、ＫＫ氏自身も次のように話す。

> 何かしたら細かい仕事はこうやって出来るときは女の人だね。花なんて言うのは女の人得意な仕事いっぱいあるわけだ。例えばよ、収穫作業だ。（KK氏インタビューより）

夫婦ともに、女性には相応しい「女性らしい」分野があり、そうした伝統的な性別規範に沿って、女性らしい部分を担ってもらうことでうまく役割分業ができるという認識をもっていることがわかる。一方で、次のような話もあった。

> 分かれてるっていうより、分担みたいな感じによ、はっきり分ける訳じゃないが、その時によって。だからその時その時に合わせていったらね。ただ向き不向きはあるから何でもできる訳じゃないから（ＴＳ氏インタビューより）

> 作業自体は男女関係なく一緒にやってる。足らない分は子供や都合悪かったら他所から頼む。（ＢＴ氏インタビューより）

> 妻には手伝ってもらっている。ただ、お手伝いっていってもやってもらった時間に対してはお給料をお支払いするという形で。（SN氏インタビューより）

以上のことからは、伝統的な性別規範に沿った場合もある一方で、そうしたものにとらわれず必要な部分で柔軟に作業を分担している場合があることもわかる。そして、作業に応じて賃金を支払うというケースがあることもわかる。このことは、どのように解釈できるであろうか。まず、どのケースでも女性が「手伝う」という認識を持っていたことから、男性が運営の中心的な主体であり女性が補助的な役割を持つという、ある意味の伝統的な性別役割分業規範が前提にあることがわかる。一方で、繁忙期を中心により作業分担は柔軟で線引きは曖昧になっており、必要に応じて女性は必ずしも「女性らしい」というわけもない一般的な農作業を行っていることから、本来は、女性にも普通に農作業の主たる従事者になれる可能性があることが垣間見ることができる。実際、大井沢においても趣味的なものではあるが、ある移住者の配偶者の女性が農地を借りて様々な作物を作っているケースもある。また、移住者の中には、女性だろうが男性だろうが能力があれば経営に積極的に関わるべきという話をする男性もいた。担い手の減少が続くなかにおいては、担い手に余裕があった時代の性別役割分業規範にとらわれず、男性も女性も

各々の個人の能力や経験、意思に応じて農業に参画し、場合によっては女性が主たる経営を担うことがあって普通であるという認識を持つことが重要になってくるのではないだろうか。

一方で、法人経営はどうだろうか。ＢＫ氏は次のように語る。

ほうれん草とかの収穫するにしても同じ人数かけても男と女で能率が変わってくるんですよ。結果的にその方が効率が良いですよね。逆も言えるわけですよ。女性が力仕事させても効率が悪いわけですよ。（ＢＫ氏インタビューより）

選別は女の人が。全部女だね。全部女です。（ＪＪ氏インタビューより）

以上のことから、農作業の役割分担は一見すると「効率重視」で行なっていることが分かる。また、作業においては効率を考え、男女で役割分担しているということだ。しかし、女性が必ずしも全員が選別作業などの細かい作業が得意かというとそうではないのではないだろうか。今の時点では、効率重視を考えて選別作業は女性が行っているが、1 人 1 人の性格や特徴を認識していればもっと効率よく作業が出来るのではないか。だから、個人の性格や特徴を踏まえた上で、1 人 1 人が効率よく出来る作業をすれば今まで以上に農作業が効率よく出来るのではないだろうかと考える。

４．６．まとめ

４．６．１．農業を始めるきっかけは様々

農業を始めるきっかけは人それぞれ異なるが、特に移住者の場合、この傾向が強い。大井沢で生活するための手段である人、大井沢の農産物を多くの人に知ってもらいたいから始めた人がいる。大井沢の美味しい農産物を知ってもらい、作りたいと思ってもらうことができれば農業従事者を増やすことができるのではないだろうか。一方で、地元住民の多くは自身が農家の出身であることや、長男だからという理由であることが分かった。

４．６．２．大井沢農作業受託組合の存在

大井沢の農地の継承においては、大井沢農作業受託組合の存在が大きい。現在、受託組合で請け負っている農地は大井沢全体の 7 割ほどの面積（約 60ha）に達する。そして、受託組合は農地の保持や景観を守っているだけでなく、耕作放棄地が増えて大井沢地区の居住悪化を防ぐ役割を果たしている。このことは、大井沢全体で再評価されるべきである。

４．６．３．経営体制による農業従事女性の役割の違い

経営体制による農業従事女性の役割の違いを見ると、法人経営では一定の人数がいるから役割分担を行うことができているが、家族経営の場合は法人経営ほどの人数がいないため、決まった役割分担をせずに農作業を行っていることが分かった。法人経営では一概にとは言えないが、性別役割分業意識があるのではないか。しかし、農作業において性別役割分業意識が良いとは一概に言えない。だから、個々の女性の個人や能力を生かせるような仕組みを構築することが必要なのではないだろうか。

４．６．４．農業で生活していくことの厳しさ

農地の継承において農業関係者は欠かせない存在だが、調査をする中で、農業で生活していくことの厳しさがあった。実際に、国民年金は厚生年金に比べると手厚い保障が少ないことや先祖代々から受け継がれている農地を守り、維持していかなくてはならないと思っている高齢者がいる。こうしたことを背景に、農業関係の地元住民はそうした時代のことも含めて子供に無理に農業を強制することが出来な

い。このようなことが担い手不足や農地の継承にも影響している。したがって農業をしながら生活していけるような仕組みを作ることが大事である。

４．６．５．農地の捉え方

農地を所持している方の多くが先祖代々から受け継がれている農地である。その為に、高齢者を中心に農地を守らないといけないという気持ちを持っていることが分かった。こうしたことから、農地を次の世代に負担をさせないように継承を望んでいないことが明らかになった。しかし、移住者の場合は代々継承されている農地がないため、農地を負の遺産と捉えていなかった。したがって、農地の継承においては、家族以外の継承方法を考える必要がある。

４．６．６．　地元住民と移住者間の相互理解の必要性

農業関係の移住者の場合は、農業で作業時間が長くこともあることはもちろん家庭の都合等やらないといけないことがある。そうしたことから、地域活動に参加できずに地元住民との意思疎通の場が減少していることが分かった。私は、地元住民にこうした現状があることを認識し、理解してもらう必要があると感じた。そして、農業は就業時間がある程度見込みがたてやすい他の仕事とは少し違うという認識もしてもらう必要があるのではないかとも感じた。

４．７．考察

今回の調査から、農業関係の地元住民と移住者、そして大井沢住民の協力なしでは農地の継承が困難であるということが分かった。受託組合も例外ではなかった。組合員は男女ともに高齢化が進んでおり、また、既に担い手不足になりつつある。この影響もあり、受託組合の農作業の実施、新たな農地の受託が困難になりつつあることが分かった。こうしたことを背景に、農業や農地の継承においては、農業関係の移住者と地元住民が協力していくことが重要になってくる。しかし、農業をするにあたって欠かすことの出来ないコミュニケーションが、農業関係の地元住民と移住者の間で支障があった。ゆえに、地元住民と移住者の間に仲介役的な存在を入れて、両者のコミュニケーションを円滑にしていくことが重要だと考える。移住者も大井沢地区の農地や耕作放棄地の現状を理解しており、農地が荒れていくことへの危機感や自分たちも率先して行動を起こしていかないといけないと感じている。こうした移住者の気持ちも踏まえ、地元住民、移住者関係なく協力していく必要があると考える。

現在、大井沢農作業受託組合では大井沢全体の約 7 割の農地を受け持っているが、担い手不足や従業員の高齢化など厳しい状況にあることに変わりはない。また、受託組合は夏しか活動をやっておらず、冬は活動をしていない。つまり、一年を通じて農業ができていないという事である。しかし、大井沢の農業従事者の中には、作物の種類を増やしたり町内の他地区に農地を借りるなどして、通年で農作業を行っている人もいる。受託組合においても、年間を通して農業ができるようにすることで、組合員の売上・雇用・収入を安定したものにする必要がある。今の状態では、大井沢農作業受託組合のもとで生計を立てていくのは難しい。一方で、若者は安定して働ける職業を求める傾向がある。したがって大井沢地区で年間を通じて農業で生活していけるような仕組みを作るべきだと考える。

また、農業は他の職業とは違い自然相手で計画通り、思い通りにいかないことがある。そして子持ちの農業関係の移住者の場合、子どもの用事などに合わせなければならないこともある為、仕事と家庭の両立で精一杯であることが分かった。そのため大井沢地区では地域活動などもあるが、中々参加できていない現状がある。だから大井沢地区の住民には農業関係者にそうした現状があることへの理解や把握をしてもらう必要があると考える。

４．８．結論

今回の調査は、以下を目的として実施した。特に平成に入って、日本の農地面積が年々減少し続けている。農地面積の減少要因に耕作放棄地が増加しているからである。耕作放棄地が増加すると害虫や雑草の増加、多面的機能の喪失に加え、住民の生活にも影響を及ぼす。特に中山間地域でこの傾向が強い。中山間地域では高齢化・過疎化が進行している。また、農業従業者の高齢化や減少もしている。こうしたことから耕作放棄地が増加している。農地の継承は従来家族で経営継承が行われていたが、現在は家族単位から集落単位へ移行し、耕作放棄地を抑制する動きがある。農業における高齢化や担い手不足の問題を抱える山村地域である山形県西川町大井沢地区では農地面積減少要因の 1 つである耕作放棄地があることで地域にどのような影響が及ぼされてのかを明らかにすることを調査目的とした。

このテーマに即した先行研究には、家族経営の経営継承の特徴や課題、そして新規就農にするにあたっての就農上の課題などを扱うものがあった。田口は家族経営の経営継承者の特徴として、長子が経営継承を行なっているとして、特に中間農業地域では長子相続制が強いと述べている。また、長子相続制が残っていることにより、経営継承者がイエの継承と経営の継承もしている。さらに、産地として定着した作物があることで世代間で農業生産技術を含む経営資源、意思決定権が継承されているとした。しかし、農業の家族経営の経営継承において課題もある。澤田は、農業の継承において後継者・配偶者の確保が必須だとしているが、後継者と配偶者共に確保割合が低いため世帯継承と農家の継承も困難な状況であると述べている。黒河は新規就農者が就農にするにあたって営農上、生活面での課題があることを指摘しており、営農上では「技術、資金、土地」の課題があることを述べている。

これらの先行研究から、農業者の高齢化や人手不足が深刻化している大井沢地区では農地がどのように継承され、または継承されていないのかを調査課題として設定した。また、大井沢地区には農業関係の地元住民と新規就農した移住者がいるが、地元住民が移住者への期待はあるのかを踏まえた上で農地の継承に対する両者考えの違いを調査課題として設定した。また、農業にあたり女性は欠かせないであるが、大井沢地区の女性農業においてどのような役割をしているのかを調査課題として設定した。

この調査を行う上で、3 つの仮説を立てた。家族経営者の場合は家族によって継承できる、またはできないがあるのではないか。つまり個人によって違うのではないか。また、農地の耕作が困難になった場合は受託組合に預けているのではないかと考え、それに伴い、農地の所有権と耕作権は違い、安く設定されているのではないか。そして農地の継承において地元住民は新規就農者である移住者に期待しているのではないか。またその頑張りを認めているのではないかと考えた。農業関係の女性の役割は一概には言えず、経営体制によって役割が変わっているのではないかという仮説である。

以上の仮説をもとに、調査をした結果、6 つのことがわかった。まず、世帯構成では地元住民の多くは、夫婦で暮らしていることが分かった。子供はいるが他出子として山形県内または他県で生活している。子供の数としては 1 世帯に 2 人から 3 人いることが明らかで、中には 3 世代世帯もいる。この場合、農作業も世代を超えて行なっていることが分かった。移住者の場合は独身者や小さい子供がいる世帯がいる。

また、農業関係者の農業をはじめるきっかけは地元住民の場合は「長男だから」、「農家の出身だから」という理由で始めていることが分かり、移住者は大井沢地区で生活していくための手段であり、農業をしたくて移住してきたわけではない。稀なケースとして、現在の西川町内で耕作放棄地が増えていく現状を見かねて農業を始めた方もいる。そして大井沢地区の農地において、大井沢受託組合の存在が大きく、現在、受託組合で請け負っている農地は大井沢地区全体の 7 割ほどの面積で６０ヘクタールあった。受託組合は農地の保持や景観を守っているだけでなく、耕作放棄地が増えて大井沢地区の居住悪化を防ぐ役割を果たしている。したがって大井沢地区や大井沢住民にとってとても重要な組織である。

農業における女性の役割については、今回の調査で経営体制によって女性の役割が違うことが分かった。違う理由として人数が関係している。法人経営である大井沢農作業受託組合はある程度の人数がいるために男性は力仕事、女性は選別などの作業と男女で作業を分けているが、家族経営の場合、受託組合

のように人数が多いわけではないために男女関係なく一緒に作業を行っている。しかし、家族経営でも花などの収穫作業は女性の方が得意であるため、状況によっては男女で作業を分別している。法人経営でも家族経営でも農作業において効率を重視していることが分かった。しかし、調査をしていく中で農業で生活していくことの厳しさを知った。今の時代、農業で生活をしていくのは厳しく、あらゆることにお金のかかる時代である。だから農業関係の地元住民はそうした時代のことも含めて子供に無理に農業を強制することが出来ない。このようなことが担い手不足や農地の継承にも影響していることが分かった。また、農地に対する捉え方として、農地を所持している方の多くが先祖代々から受け継がれている農地である。その為に農地を守らないといけないという気持ちを持っていることが分かった。しかし、若者から見ると農地を持っていることで自由な生活ができないと感じていることがわかった。だから若者は農地対してあまり良い印象を持っていないことが分かった。しかし、農地は良い印象に捉えることもできる。したがって悪い印象に捉えられてしまう農地をどう変えていくかが課題である。

さらに、農業関係の地元住民と移住者間でさらに相互理解を深める必要性があることも分かった。というのも、農業を行なっていく上で欠かせないコミュニケーションが移住者と地元住民間でしっかりとれていないために互いにどうすればよいのかわからないことがあることがあるのだ。また、農業は自然相手で中々計画通り、思い通りにいかない。そのこともあり、仕事と家庭の両立をするだけでも大変だという事が分かった。大井沢では様々な地域活動もあるが、仕事と家庭のことも考えると参加できないことがある。こうしたことから移住者と地元住民との付き合い方の難しさが出てきている。

以上の分析結果から、農地の継承において農業関係の地元住民と移住者の協力が必要不可欠であり、地元住民と移住者間でより意思疎通を緊密に行っていく必要があると考える。これをスムーズに進めるためにも、地元住民と移住者間の仲介役となれる存在が重要である。また、耕作放棄地の抑制、居住環境の悪化防止、景観保持の役割をしている受託組合の存在は大きい。したがって耕作放棄地問題は農業関係者だけでの問題ではなく、非農業関係者にも関係する、大井沢全体の問題であることを理解しておく必要がある。

【参考文献】

黒河功、2012 年、「家族経営における経営継承の条件と課題」、日本農業経営学会編『農業経営研究』、36 巻（1999）4 号 4-10
澤田守、2016 年、「家族経営における農業労働力の動向と課題」、日本農業経営学会編『農業経営研究』、51 巻（2013）2 号 114-119
田口瑠奈、2012 年、「家族農業経営研究における経営継承の特徴」、日本農業経営学会編『農業経営研究』、39 巻（2001）2 号 109-114
西川町、2017 年、『にしかわぐらし』西川町役場
農林水産省、2010 年、『食料・農業・農村白書』、農林水産省
農林水産省、2011 年、『食料・農業・農村白書』、農林水産省
農林水産省、2015 年、『食料・農業・農村白書』、農林水産省

５．現代山村社会における農村移住・定住の可能性
―大井沢における「移住者」と心理的障壁、支援制度についてー

伊藤星那 ※

５．１．調査目的

2008 年以降、支援制度の充実から田舎暮らしブームが起こった。しかし、現在の日本では中山間地域の過疎高齢化が進んでいる。

内閣府は、人口や経済社会など日本の将来像に関する世論調査を行い、その結果をまとめた。都市に住む人に地方に移住してもよいと思うか聞いたところ、「思う」「どちらかといえば思う」の合計が 20～40 歳代でそれぞれ半数を超えた。多くの世代が地方移住への興味をもっていることが明らかになった。移住してもよいと答えた人に移住の条件を複数回答で尋ねたところ、「教育，医療・福祉などの利便性が高いこと」を挙げた者の割合が 51.1%,「居住に必要な家屋や土地が安く得られること」を挙げた者の割合が 48.9%,「買い物などの生活の場や文化イベント，趣味の場などが充実していること」を挙げた者の割合が 42.6%,「移住に必要な情報提供などの自治体の支援があること」を挙げた者の割合が 35.3%,「今の職場より魅力的な職場があること」を挙げた者の割合が 26.8%,「道路などの社会基盤が整備されていること」を挙げた者の割合が 25.3%などの順になった。また、居住している地域が更に活性化するために期待する政策はどのようなものか聞いたところ、「多様な世代が共に暮らせるための福祉、医療の充実」を挙げた者の割合が 45.5%、「地域に雇用を生み出す新産業の創出」を挙げた者の割合が 42.6%と高く、「安心して住み続けるための防犯，防災対策の充実」は 37.7%、「商店街の活性化対策や，まちなかの居住環境の向上などの中心市街地の活性化」は 37.2%となった。（出典：2013 年内閣府調査より）

近年、全国の中山間地域では人口減少に伴う、過疎・少子高齢化による“担い手”の不足が大きな問題となっている。この問題の解決策として総務省では「地域おこし協力隊制度」、農林水産省では「田舎で働き隊制度」など取り組みを行っている。しかし、雇用や住宅の諸問題から移住に踏み込めない、移住しても東京に戻ってしまう逆 U ターンする課題が挙げられる。これらのことから、過疎高齢化を防ぎ若者などの移住者を増やしていくために、移住者はどのようなことを理解していく必要があるのか、移住者が定住するための大きな要因の一つである「収支」面の現状と課題を明らかにする、また中山間地域はどのような支援をしていくことが移住者増加につながるのか調査したい。

５．２．先行研究の整理と移住者の概念

５．２．１．移住者が求めるもの

まず、農村移住に関する先行研究について整理をしたい。

『都市と農山漁村の共生・対流に関する世論調査』によると、国民の三割が農村との共生・対流の実践を考えているという。一方で、同じ調査においては都市住民が農山漁村で定住する際の問題点として、約半数が仕事がないことを問題挙げ、特に 20 代でこれを挙げている割合は 70%にも上った。また移住先を決める優先順位は、①「自然環境が良い」、②「住居がある」、③「就労の場がある」という結果になり、③を答えた人の 8 割が 20～40 歳代の人であった。移住のタイミングでは、①「定住先の住居が決まったら」、②「今すぐに」、③「会社を定年したら」、④「その他」の順で挙げられ、特に 20～40 代を中心に移住先での仕事を決めずにライフスタイルをひとまず見直そうという漠然と考えている層が増加していることが分かった。これらのことから、移住を決意するにあたっての課題は、“住まいと仕事”であることが明らかになった。

次に新潟県の中越地域におけるアンケート調査の結果、移住者の世帯構成は単身者が 54%と最も多く、2 番目が夫婦で 21%、3 番目が夫婦と子供で 17%であった。20～30 代に移住のきっかけと決め手を調べ

※ 跡見学園女子大学　観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科 3 年

たところ、移住前に地域と関係性があり交流を深めることにより移住に至ったケースと、地域おこし協力隊などの一定の所得の確保だった。これらのことから、20～30 代は「地域との関係性」と「最低限の収入の確保」など“人”と“仕事”が重要なポイントであることが分かった。それと比べて 50～60 代は、メディアの情報を収集し移住に至った、土地や地域の環境の良さであった。これらのことから、50～60 代は“環境”と“住まい”が重要なポイントであることが分かった。移住後の収支では、自給自足や地域との関係性を築き食費を抑える生活を実践する、地域おこし協力隊制度や雇用先の NPO 法人で家賃を負担しているケースがある、地方では自家用車で行動する人が多いため車の燃料費が高いなど様々な意見が挙がった。移住者の就業形態は、自営業が 21%、就職が 25%、年金が 4%、複数の業種の掛け持ちが 38%、その他が 21%という結果になった。この結果から、地方移住は一般的な企業の雇用ではなく、複数の業種の掛け持ちが収入の安定につながっているということが分かる。今後期待する移住支援策という項目では、移住者の収入サポートと、移住者の暮らしのサポートの二つが挙げられた。これは移住者同士の交流の場づくりが重要であることを意味している。中山間地域の過疎高齢化は日本社会全体の問題となっている、中山間地域は食料やエネルギー・治水など重要な役割を果たしている、若い世代が活躍できる舞台の一つが中山間地域、また様々な調査の結果から中山間地域が担う役割が大きいことが分かった。(日野、2013)

山田晴義によると、移住者には典型的と思われる層がある。一つ目は、何か課題を持ってこれを実現するために移住する課題追求型である。二つ目は、快適な自然環境の中で趣味的な活動を通して気ままな暮らしを求めるゆとり暮らし追求型である。三つ目は、どちらとも言い切れない中間的な層である。課題追求型は、「農林漁業による生計」、「自給による安全な食の確保」、「農山漁村での教育・子育て」などを実現するための場を求めて農村に移住してくる。追求型・中間型は、定年後の高齢者も多く含まれ、組織社会の拘束や都市の喧騒を避けてゆとりを重視する。つまり、移住地は移住者のコスト感覚と経済力並びに家族関係に左右され、あとは農村の人や情報との出会いなどで決まるということが分かった。また移住の受け入れに期待するものとして人口減少の歯止めや税収の確保、地域活動の再生・活性化などが挙げられた。それと移住者受け入れのリスクの不安として、高齢化に伴う自治体の医療その他のケアなどに関わる負担、自然環境の変化や破壊などが挙げられている。移住者受け入れの期待の事例では、地域資源の価値化や交流人口拡大による経済活性化が見られた「ふるさと運動」や、生活工芸の価値化・商品化のための情報や技術を提供するようになり、経済的な効果も得られ住民の意識的な活性化も見られるようになった「ふるさと会員制度」がある。このように、農村移住を地域再生に結び付けるには、住みやすく魅力のあるまちづくりの推進が基本にあり、そのなかで多様な主体の持つ必要資源を引き出し主体間の協働による仕組みを用意して取り組む必要があることが明らかになった。

以上のことから、移住のきっかけは、環境や地域と関係性がある、一定の所得の確保であった。しかし農村移住に対する課題は仕事がないことであり、所得の確保に関して問題がある。特に 20 代の若者の多くがこれを指摘している。移住者は複数の業種の掛け持ちが収入の安定につながっているが、自営業や就職は町のサポートが無ければ難しい部分もある。移住者を呼び込むためには収入を確保するための支援を行うことがポイントになる。

５．２．２．移住者の定義

今回調査の対象にした「移住者」は、ほとんどが家族で家ごと大井沢に移住した人たちである。一方で、大井沢には進学や就職のために一度町から離れ、また戻って来た住民も多々いる。あるいは、家ごとではなく大井沢の家に婿や嫁として入り、移住をしてくる人もいる。しかし、大井沢においてこうした婚入者を指して「移住者」と呼ぶことは少ない。それでは、そもそも移住者とはどのような人たちを指すのか。調査をして見えてきたことがある。

移住者とは、他の土地または国へ移り住むことである。家ごと越してきた人はもちろん移住者になる

が、この定義でいけば、進学や就職といった理由で土地を離れて生活していた人も移住者に含まれると考える。しかし、多くの場合、移住者とされるのは新しく越してきた人であり、土地を離れまた戻ってきた人は地元住民とされて大井沢においてもこれが当てはまる。この認識の違いには、地元要素が関係している。生まれも育ちも変わらない人は地元要素が強くある。また何らかの理由でその地を離れ再び戻ってきた人も、地域の人と昔から面識があるためこちらも要素は強い。その地域の出身者と一緒になり越してきた人の場合、一人は移住者として認識されるがもう一人はその地域の出身者であり住民にとって知らない人ではない。この場合は要素が前と比べて弱くなるがまだ残っている。さらに、近年では祖父母が暮らしていたということがきっかけで移住してくる「孫ターン」というものもあるが、これも、血縁上地域とのつながりがあると認識されるもので、たとえ本人が地域に居住等の経験がなくても地元要素があることになる。

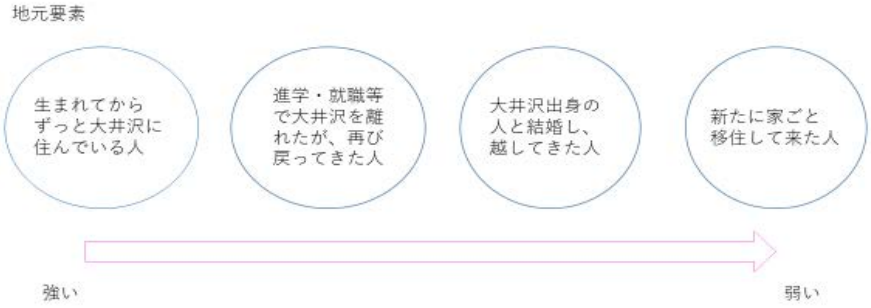

図５.１.移住者とは誰か

しかし地縁や血縁をまったく持たず、家単位で新しく引っ越してきた人となると、その地域との関わりは無く住民との接点もない。そのため地元要素も存在しない。その結果、地域においては、誰からも「移住者」として見られるようになる。

このように、移住者とされる定義には地元との関りが大きく関係していると考えられるが、本調査においては、原則、最も地元要素の薄い、血縁や地縁をまったくもたずに家単位で引っ越してきた人を「移住者」として取り扱いたい。

５．３．調査課題

先行研究を踏まえ、調査課題を以下のように設定した。

移住の決め手に、移住する前にその地域と交流があったという理由が挙げられている。年代に関わらず、移住者全員がその地域と交流があるとは限らない。まったく接点がなく、移り住んできた移住者に対して地元住民はどのように感じているのか、また移住者は住民に対してどのように感じているのか。

移住するにあたり、移住のきっかけやなぜこの場所を選んだのかというのは、その場所に何かしら惹かれるのもがあったからではないか。先行研究にもあるように、快適な自然環境の中で暮らしを求める人もいる。移住の決め手等が分かれば、それが町の魅力の再発見につながる。このことから移住の目的と、なぜ大井沢を選んだのかである。

生活していくためには収入がなければいけない。移住してもそこでの生活が困難になればそこを去ってしまうこともある。20 代の若者が仕事の支援に関して特に指摘していることが分かっている。移住者が必要としている支援は何なのか、また大井沢にも移住に関する支援があるが、移住者を受け入れるためにはどのようなサポートが必要なのかを明らかにする。

５．４．仮説および調査の概要

これらの調査課題について、以下のような仮説を立てた。

まず、きっかけについては大井沢には月山や朝日連峰といった自然に囲まれている地域であるため、このような環境を理由に移住してきている人がいるのではないか。

移住後の支援に関して、西川町の支援制度があるためそれを利用して移住しているのではないかと考えた。また移住後のサポートに関しては公的なものは存在していないが、住民たちが移住者を個々で支えているのではないかと考えた。隣近所に野菜を分けるといった田舎ならではのサポートであり、大井沢にもこのようなサポートがある。職に関しても制度が存在し、仕事を紹介すると言ったサポートがあると考える。

その地域と関わりがある移住者と比べて、接点のない移住者はすぐに住民と打ち解けられるとは限らないが、その地域の行事等に参加し交流をすることで徐々に距離が縮むものである。

以上のような仮説を設定し調査をした。調査は 2017 年 9 月 4 日～10 日にかけ、このテーマに関する 22 人にインタビュー形式で行った。インタビューは一人当たり 60 分程度実施したが、対象者の都合により一部は 120 分程度になったものもある。また調査の一環として、9 月 9 日の例大祭前夜祭、9 月 10 日の例大祭に参加し、地域の方々と交流しながらインタビューを実施した。

５．５．調査結果の概要

調査をした結果、次のことが分かった。1 つ目は、調査地に現在も定住をしている移住者の中には制度を利用した人は、任期中の地域おこし協力隊員と移住者の２人を除いて、いなかったことだ。制度を利用していなくても、地元住民から野菜を分けてもらったり、震災時にはラジオを借りたりなど個人的なサポートを受けている人が数名いたことが分かった。２つ目は、移住者はよそ者であるとみられることがあり、意見を主張しても反発されるなどなかなか言えないことがあるということだ。意見を言おうと考えている人もいたが、移住者に対して壁を作っている住民がいることが分かった。またこの壁は移住年数に関係なく、ずっと残っていることが分かった。3 つ目は、移住後の職業に関することだ。移住の目的として農業が挙げられるが、今回の調査では移住後に農業をしている人もいたが全員というわけではなく、その地域の環境を求めて移住し仕事をしている人もいることが分かった。これは地域の魅力に繋がると考えられる。

５．６．分析

５．６．１．移住した理由

移住したきっかけ、また大井沢を選んだ理由は様々であり、年齢層や家族形態も異なる人々が移住している。M.K 氏は、仕事関係である。伝承館の中に和紙工房が作られたが空き状態が続いたために、伝承館で紙漉きをやらないかという誘いを受け下見に訪れた結果、移住することになった。T.T 氏は陶芸家であり、同じように仕事の関係で移住してきたが、親の出身が山形であったことや子育て環境も要因である。インタビューを行い、得られた理由を表５．１に記載する。

> 焼き物を登り窯でやりたい、煙をいくら出しても文句を言われない所っていうので大井沢に来た。子供たちが大人になった時に自分の力で色んな経験をしながら育った方が生き延びる力というか生き残る力というか生きていく力がつくんじゃないかなと。子どもがもっと自然の中でのびのびと育つにはと考えた時にやっぱり田舎がいいなとなった。（T.T 氏インタビューから）

このように同じ仕事の都合で移住しても、T.T 氏の場合は都会にはない田舎ならではの環境を選び移住してきている。また子育てでも田舎の環境を選んでいることが分かった。Y.H 氏は次のように話す。

> IT 業界は 50 歳を過ぎるとついていけない、3 か月おきに新しい技術が入ってくる。そうすると、多分一番働けるのは 40 までかな。自分で定年を決めて、日進月歩の世界で製品においまくられ、会社に追いま

くられ、ってやっていると何もないところに行きたいんですよね。東京で住んでいたのは六本木でしたから、スーパーやコンビニも何軒もあるし、新宿・渋谷まで30分だしってなると、もう少し不便なところにいきたくなる。人間こんなに便利でいいわけないなって。だからもう少し人間は不便な生活をするべきなんじゃないかなって言う感じもあって。だったら何もないところに行こうって。自分を解放する感じ。(Y.H氏インタビューから)

便利なものに囲まれた環境よりも少し不便なところで生活したいという理由であり、他の移住者の話にも「この不便さが楽しい」という意見もあった。S.R氏は次のように話す。

当時不景気でね、景気が良ければ二重生活をしたかったんだけどね、東京とこっちね。夏はこっちで冬は東京。景気が悪いからそんなことできなくて、不動産全部引き払ってこっちに。彼女の地元がここで、昔から私は東京に骨をうずめるっていう考えはなかったから。(S.R氏インタビューから)

という理由であり、T.T 氏と同じく山形出身の人が身近にいたため、この地を選んでいることが分かる。Y.H 氏や S.R 氏は東京で働きながら生活し、仕事を退職してからは都会ではなく田舎で暮らしたいという思いがあった。

また移住してくる家族形態もそれぞれ異なっている。仕事の関係等で単身で移住してくる場合もあれば、家族で移り住んでいる移住者もいることが分かった。移住してきた人々は、ただ単に来たわけではなく仕事やそれぞれやりたいことなど、目的を持って移住してきていることが分かった。

表５．１．移住理由／移住地に大井沢を選んだ理由

M.K	Y.H	T.T	S.R	T.I	B.N	O.K	N.T	Y.D	B.K	S.N
紙漉きの誘い	不便な場所で生活	母親が山形出身。子育て環境。	不景気。奥さんの出身が大井沢。	色々と探した結果たどり着いた。	紙漉きの後継者として	偶然	農業人フェア	田舎暮らしがしたい、憧れ。	雪まつり	住み込みのアルバイト

５．６．２．支援制度の利用者

今回話を聞いた人の中には、表５．２を見ても分かるように公的な制度を利用して来た人がほとんどいない。そもそも移住した当時にはまだ制度が無かったということが分かった。そのため、自分でこの場所を探し見つけ、移住して生活している。しかし移住者の中には制度を利用した人もいる。

雇用促進住宅に住んでいるんだけど、農業の人に限って2万円の支給がある。だから実際家賃は全くかかっていない。電気、ガス、水道含めて5千円の支給があり、負担はほんの少しで、3LDKに住める。(N.T氏インタビューから)

基本、協力隊は光熱費もだし、生活一般。光熱費、車、ガソリン代、食費以外。お給料がでるので、完全に補助がある。家賃も補助。それで生活させていただいている。(B.N氏インタビューから)

雇用促進住宅を利用し生活していることや、協力隊の場合は国から補助が出ていることが分かる。その反面、支援制度がつくられてから移住し現在も住み続けている人がいないことも分かった。T.T 氏は移住前に当時の区長から住民に対して紹介してもらった結果、すっと受け入れてもらえたというようなサポートがあった。Y.D氏も地元住民にサポートしてもらった経験がある。

ちょうど震災の年で、そのときはいろいろ停電したり食料がこのあたりで買えなかったりして、お風呂に

入れてもらったりとかラジオを貸してもらったり、そういうのは最初サポートしてもらったかな。
(Y.D 氏インタビューから)

このように移住してから全くサポートが無かったわけではなく、地元住民に家や職業の紹介をしてもらうといった個人的なサポートを受けていることが分かった。物の貸し借りといった近隣住民間でのサポートは、都会ではあまり見られない光景であり、田舎ならではのものである。

表５．２．支援制度の利用

M.K	Y.H	T.T	T.I	B.N	U.A	O.K	N.T	Y.D	I.Y
無し	無し	無し	無し	D.K(協力隊の為)	無し	無し	有り	無し	無し

５．６．３．移住前後の苦労

移住するにあたり、引っ越し費用などのお金を集めることや、方言がある地域では言葉を理解するまでに時間がかかるといった大変さが考えられる。また移住後も言葉の理解はもちろん、その地域の行事や規則を知るまでが大変といったイメージがある。大井沢に移住した際に、どのような部分で苦労したのかインタビューから明らかにし、結果を表５．４にまとめた。以下の意見は移住前の苦労である。

そういうときって楽しいからね。お金を集めたりするのが大変だったけど、それは別に一環だし。大変さはない。楽しいばっかり。いろいろ挨拶してまわったり。(T.I 氏インタビューから)

移住する前にしてもそうなんだけど、コミュニケーションというか言葉の壁が。表現が独特だから方言の。逆の意味で使っている言葉とかニュアンスがあったりとかして、あれ違ったのかっていうことがちょいちょいあった。(T.T 氏インタビューから)

このように、移住前は特に苦労はなく楽しさがあるということや、遠いところから来た人もいたため引っ越し費用が高い、方言により言葉の理解が出来ないといったコミュニケーションで苦労したという話を聞いた。また方言が独特であり言葉を理解するのに苦労したというも分かった。その他の意見で、自分よりも大井沢に呼んでくれた人たちの方が、手続等で苦労したと思うという話もある。以下は移住後の苦労である。

言葉が分からないっていうのと、あと何をやったらいいのかわからない。指示の仕方がよく分からない。「あれ」「あそこ」「そこ」やっとけ、いやそれじゃわからないしっていう部分もあるし。あとは、食文化の違いかな。今まで向こうで食べていた物がこっちにあまり売っていない。(N.T 氏インタビューから)

いっぱいある。まず、車の免許を持っていなかったのね。全然車必要じゃなかったので、最初から免許は持っていなかったの。大井沢に来たときは原付の免許しか持っていなくて、最初はそれで買い物に行っていたけどそれじゃあ不便で、こっちにきてから普通免許を取った。冬道とか全く慣れていないから。雪多いし免許取りたてで、冬道なんか全然慣れてないから。それが大変でしたね。
(M.K 氏インタビューから)

移住後は、移住する前と同じように言葉の壁が挙げられる。方言の理解や使用している方言の意味が違っている、また東京で食べていた物が売っていないといった文化の違いによって住民との付き合い方が難しいという話もある。そして大井沢などの地域では自動車が生活に不可欠になってくるため、新たに

免許を取得するのが大変であった、また雪の量がかなり多い為冬の生活が厳しいということが分かった。

表５．３．移住前/移住後の苦労

	T.T	T.I	B.N
移住前	言葉の壁	資金集め	特にない

	M.K	Y.H、T.T	T.I	B.N	U.A	O.K	N.T	Y.D	B.K	S.N	S.R、S.E
移住後	免許取得	言葉の壁	知らないことが多い	引っ越し費用	就職	買い物が遠い	言葉の壁 食文化	冬の生活	特にない	移住者と地元住民の付き合い方	人付き合い

５．６．４．必要な支援

生活していくうえで重要な職と家の紹介、援助に関しては共通して同じ回答が得られた。また子育て支援や就農支援はあるが、その他の職業支援がない。「子育て支援はどの県でもやっているから」といった話が合った。大井沢に移住した全ての人が農業をしているわけではない為、農業以外の職の支援が必要になる。また協力隊に関しては、現在移住して生活している B.N 氏は次のように話す。

他の協力隊に関して言えば受け皿がない。移住とか定住してほしいと思っているならば、もっと町が協力隊は言い方おかしいけどお仕事をつくってあげないと、その先たぶん彼女たちは帰るよねって思う。例えばなんだけど、この近くのおおえ町とかあさひ町は上手に運営している。例えばふるさと納税のリンゴを作らせるために来てもらうってなると、お仕事があるじゃん、お仕事があったら来やすい、成功例があればもっと来やすい。だけどここは協力隊の人で残っている？って感じ。」だからお仕事とかもっとそこまでフォローしないといけないし、田舎活もやっていていいとは思うんだけど、私は田舎活やりましただけだと思っている。そのあと例えば、3 年後、5 年後を目標として移住者 3 人って決めないとやっているだけだったらたぶん来ないと思う。そう私は思っている。協力隊にしかりやっている人の目標がない。受け皿や就職先など、もっと根回しをしておかないと。町自体がどうしたいのか、大井沢地区自治体が移住を受け入れたいのかっていうことが見えない。（B.N 氏インタビューから）

協力隊が定住につながるモデルを作り、具体的な例を挙げることで定住者を増やすことにつながる。またなぜ協力隊を受け入れるのかといった目的を提示することでより町に来やすくなる。

コーディネーター見たいな人がほしい。自分の場合は D.R 氏（地元住民）だったけど、D.R 氏も家の紹介だけだったから、そのあとまで引き続き世話をしてくれる人がいれば移住はしやすいのかな。（Y.D 氏インタビューから）

移住する前のサポートだけではなく移住後も引き続きサポートしてくれる人がいればもっと来やすくなるという話もある。

５．６．５．地元住民との壁

インタビューから、地元住民との間に生じている、見えない壁があることが分かった。移住者はどんなときにどのような状況からこの壁を感じているのか調査をした。まず移住してからまだ日の浅い移住者に話を聞いた。

そんなにはないんだけど、当たり前と思ってしまっているから、連絡がこないことがある。例えば、通例

で夏祭りをやっているから、彼らたちは普通でも私は初めて来たから知らないでしょ。お手伝いしていいのかも分らないから、行かないといけないのか行かなくてもいいのか分からない。一言声かけてもらうとかね、連絡とか報告が 1 つ足りないからちょっと戸惑う。それを壁と言ったら壁だし、今のところそんなにはないけど、移住してきたおじいちゃんとか、俺らは所詮よそ者やってすごい言う。それは聞くよね。みんなの口から聞く。私たちはどこまでいっても交われないから。それはきっちり肝に銘じないといけないと言われた。(B.N 氏インタビューから)

住民からみると当たり前の行事であるが、移住者にとってはすべてが知らない、新しい体験である。移住者にとって行事等の連絡がこないことで、どう行動していいのか分からず、壁があると感じてしまうことがある。また先輩移住者から、自分たちは「よそ者」であり住民と交わることができないと告げられていることが分かり、これは最近の出来事ではなく、昔から続いている課題であることが分かる。次に年数が長い移住者に話を聞いた。

ここのムラの人はよそ者だからっていうからね。よそ者から来た人の、口先がまわる分たちが悪いこともあるんだ。役所からきたのでは良い人はいないな。役所から培った習性がでてるのか、粘ってばかりでね、要するにオープンじゃないんだよね、よそからきたからいいってもんじゃなくて、かえって村の人より根性悪いのもいるからね。村の人はなんだかんだ素朴なんだよね。役人以外は。役人はあんまりいいのいないな。村の連中を引き回そうと考えちゃう。(S.R 氏インタビューから)

生まれる前から知っているっていうような関係に我々が入っていくわけでしょ。そこに、距離感はありますよ。私は 17 年ここに住んでますけど、やっぱりよそ者ですからね。個々の人たちからしてきたらね。しゃべる言葉も違うし、服装もどうもちょっと違うし、だからそこの壁は死んでも残るでしょ。消えないと思う。無理に垣根を越えようとすれば、またそこで問題が起きる。よそ者のくせにしゃしゃり出てくるなって。はっきり言われたことあるもん。「Y.H さんみたいに何もしていない人に言われたくない」って。だからそういうのは、これから移住してきた人たちにも残るでしょうね。でも元からいた人たちがどんどん減ってきてなくなっちゃうから、新しく入れ替わるんだろうけど、これからこの町大井沢を活性化させていくって考えると、ここは 1 割以上が移住者だから、その人たちがかなり若くって体力ある人たちばかりがほとんどなわけだから、その人たちに何かをやらせていかなければ、成り立っていかないんじゃないかって思うけど。移住してきた人たちを利用しない手はないと思うんだけど、けども、地元の人たちはよそ者に任せるのは嫌っていうか。(Y.H 氏インタビューから)

10 年以上住んでいても距離を感じているという話から移住年数との関係性がないことが分かる。移住者自身もこの壁は一生無くなることはないと感じており、移住者を増やすためにはこの意識をなくしていくことが課題である。またよそ者だからという理由で否定されるといった問題が起こっている、違う土地から移ってきた移住者に頼るのを拒んでいることが分かった。何年も住むことで町のことをより理解できる。大井沢の人口の 1 割が移住者であり、このまちをもっと良くしようと行動しても、よそ者のくせにと言われてしまう。このことには、住民の意識の中に移住者は何年住んでいても移住者であるという思いがあり、自分たちの町のことに関して移住者である他人に任せたくない、頼りたくないという思いがあるのではないか。また以下のように、観光等で短期間住むことと、実際に移り住んで生活感じることは異なるという意見がある。

外から見ると良く見える。実際ここで生活してみると、ほとんど違うから。実際に住んでみると大変なことも分かってくるから。中々ここでまとまると言っても、ここで住んでいる人で何かするって言っても大井沢ではまとまらない。古村根性で、1 人が盛り上げると潰すって、みんなが盛り上げていくかじゃなくて、そういうところがあるからよ。よそから来た人はそれは分からない。よそから来る人はいいって言う

けど中は大変。だからみんな出ていく。(D.Y 氏インタビューから)

1週間調査を行ったなかで、野菜を分けてもらう、車で送迎をしてもらう、挨拶をすると必ず返してくれるといった体験した。地元住民と交流をするなかで、とても親切にしてもらい温かい人間関係であることを感じた。しかし実際に生活して感じることではこれと異なることが分かった。よそから来た人は、自然環境や文化等を見て良いと思うところがあるが、その地域の中に入ると大変である。みんなで何か盛り上げていくというよりも、一人が起こした行動に対して潰していくという昔ながらの村の考え方が現在でも影響していることが分かった。

距離を感じるのはじょうがない。でも基本的に大井沢って地元の人だけだと限界集落。いずれなくなる。だからそこはあまり気にしていないかな。必ずしもその地元の人とお付き合いすることは大切だけど、でもある種その僕たちの世代っていうのは新しい文化を作っていく、これまでの文化を継承しつつ、でもそれを守るだけじゃ守れない、この集落は。新しいものを、価値をつくっていかないとだめなんですよ。だから地元の人からこう言われても自分の意見はあるから、そこは対等に話をしないと。
(I.Y 氏インタビューから)

これから移住する人にも話を聞いたところ、以上のように距離を感じているがそれはしょうがないと割り切っていることが分かった。大井沢の住民だけでは限界集落であり、移住者が来なければ地域の存続は難しくなる。大井沢というまちを守る、というだけではなくて今までと違う新しい文化を作り、発展させていくことが必要である。そのうえで、地元住民の意見のみならず移住者も意見を主張し、お互いに対等な立場で話し合いをすることが大切である。

大井沢に住んでいる住民の多くが親戚であり、この地域は親戚同士で繋がっている。このような環境から生まれる壁も存在している。

大井沢に限って言えば、ほとんどが蜘蛛の糸のように親戚なんだ。繋がっている。深い人もいれば細い人もいる。ほとんど繋がりを持っていて、この村の生活の基本になるのはそこなんだ。これは外から来るとよく分かる。来た時は分からない。だからここへ住み着いて、医者がいねぇの病院さ遠いのね、コンビニまで遠いの、スーパーまで遠いの、役場さ遠いのなんていう人はいないよね。だからこれに溶け込まなきゃいけない。慣れなきゃいけないという面があるけど。村の自然の史跡を掘り出そうとか、伝統を守ろうとかそういう気持ちでいるんだけど、地元の方にして見ると、親から代々、苦労に苦労を重ねているわけで、はやく子供たちにいいところに学校へ行っていいところに就職してはやく都会の方に家を建ててちょうだいよと、それまでは親たちは待っているからっていう方が多いのよ。これは僕らくらい長くいてよそから来ると気がつくんだけど。冠婚葬祭なんかがあると、そのお付き合いも全部親戚付き合い。だから親戚じゃないものは外へ置かれちゃうわけ。そういう無念さ、大げさだけどそういう立場にならざるを得ないということに感ずるわけね。よく思うのは大井沢の人たちと仲良くし可愛がってもらい、町内会に入って色々面倒を見てもらうのは絶対必要だし、これは大事なことなんだ。みんなと仲良くすることは。だけど、死んだら終わり。ということを自分に納得させていないとダメだと思うのよ。というのは何よりも大井沢という土地にお墓がないでしょ。これは大事なことなんだ。よそから来た人たちはお墓を作れないの。仲間に入れないわけ、よそから来てたら。だから息を引きとったらおしまいという覚悟のうえで来てくださいよって言いたい。(Y.K 氏インタビューから)

移住者と地元住民の間で見えない壁があることが分かった。特に大井沢はほとんどが親戚という環境である。住民とお互いに知り合いのような関係の中に移住者が加わると、移住者はその親戚付き合いの中に入ることが出来ないため、「親戚じゃない者は外へ置かれてしまう」「大井沢という土地にお墓がない、死んだら終わり」といった距離を感じてしまうのではないか。この壁の問題には、住民のほとんどが

親戚という状況が深く関係している。
次に、普段から移住促進活動等で移住者と関わりのある地元住民に話を聞いた。

よそ者って思いはないけどな。10 年 20 年経ってもよそ者って扱うところはあるよね。そういうふうな考え方をしている人はやっぱり高齢者が多いと思うんだよね。もうちょっと少なくなるとそういった意識はなくなってくると思うんだよな。助け合っていかなきゃならないっていう風になっていかないと。大井沢を助けあっていくんだっていう意識が生まれないんじゃないかな。(S.T 氏インタビューから)

大井沢のある程度の年配より上からの方は、よそ者っていう捉え方をしているような。村の行事の司会者に移住者が参加した時、苦情が来て、よそ者にやらすなよって住所もってきただけのよそ者にって言ってて、やっぱ上からの人はいつまでたってもよそ者なんだよね、そういう愕然とする。せっかく家まで建てて住もうとしているんだもの、そんなんじゃないのに、そんな考えの人もいる。
(D.K 氏インタビューから)

地元住民の話に合ったように、田舎活など移住者と関わることが多い住民は移住者に対して壁を作っていないということが分かった。またそよもの意識を否定している。距離感や壁を作っているのは移住者との交流が少ない住民に多いのではないかと考えられる。「住所を移しただけのよそ者」といった苦情があり、このことにも移住者は何年いようが移住者であるということは変わらない、また地域とは関わりのない他人であるという意識がある住民がいることが分かる。このような意見を主張する住民は、上の人であり、ある程度年配の住民が多いということが分かった。

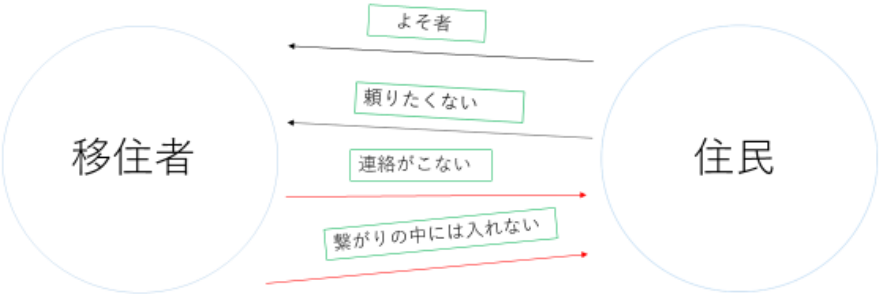

図５．２．距離を感じるときのお互いの思い

そのほかにも、「距離を感じるけど、縮まらない。周りの人が囲ってあの人はこういう人だよって話をしてもらわないと距離は縮まらないし、話をしてコミュニケーションをとらないとなかなか縮まらないと思う」や、「距離はあるが、それをどう見るのか。良いとするのか悪いとするのか」、「壁を感じることはあるが、こっちで作っていることもあるかもしれないし。全くないとは言えない。でも壊せないような壁ではない」といった話が挙げられた。何年、何十年と住んでいても距離を感じている人が多いことが分かった。大井沢は親戚が町の中に多く繋がりが深いため、なかなかその中に入れない、また入ることが出来ないことが分かった。若い移住者は距離についてあまり気にしていない傾向にあるのではないかと感じた。

５．６．６．田舎活(移住促進活動)

大井沢では、移住者を呼び込むために「田舎活」というものを行っている。都会の人に大井沢のことを知ってもらうため、伝統行事や町の魅力を SNS 等を利用して発信している。

表５．４．田舎活（移住促進活動）について

M.K	大井沢の宣伝。効き目はあるのか。実績があまりない。
Y.H	田舎活、大井沢流とは？　自分たちの興味でやるのか、見る側の趣味でやるのか。
T.T	大井沢を知ってくれること。都市部と大井沢が直接繋がるツール。
T.I	良いことだが、悪いことも言わないと。ツアーを組むと良い。
B.N	目標がない。先を想像したうえで、計画を立てたほうが良い。
U.A	関りがないから内容を知らない。悪い面も言う。根本的な部分の支援をする。
O.K	町でやろうとしていることと、地元の人がやろうとしていることはイコールではない。
N.T	周りとコミュニケーションを取ったほうが良い。プライバシーもあったほうが良い。
Y.D	移住してくる人の需要とニーズに答えられる考えがあれば。
I.Y	アピールは重要。移住者がここの魅力に気づかないと移住しようとは思わない。
Y.K	最終的に村の者にはなれない。好きにやってくださいと思っているのがしょうじきなところ。
S.R	自主性がない。
S.T	住んでもらうとなると大変。長く続けていかないとダメ。
D.K	人口流出に歯止めをかける。他から入ってもらうのが残っていく最善。

この活動に対して、賛成する意見が多かったが、良いところばかりでなく冬の生活や農業の大変な部分などの悪い面も伝えるべきという声が多いことが分かった。

西川ぐらしと一緒でしょ？やっていることは同じっていうか、効き目あるのかなって。田舎活は大井沢の宣伝。いい活動をしているとは思うんだけど、実績があまりまだない。(M.K 氏インタビューから)

「来た人をあえて支援する必要はない」という意見もあったように実際に大井沢に移住してきた移住者は、自分でこの場所を見つけて来ている人が多く、活用している人が少ないことが分かった。またこのように自ら調べて来た人よりも、呼び込むための支援のほうが重要になる。

これをやっていることで西川町大井沢っていう場所があるんだっていうことを知ってくれる、まずそこが大事なんじゃないかな。都市部の人と大井沢の人たちが直接繋がるツールとしては田舎活っていうのは非常に有効なんじゃないかなと思う。(T.T 氏インタビューから)
それを見て来たいと思うか。もう少し先を想像したうえで計画を立てた方が良いのかなと思う
(B.N 氏インタビューから)

最終的には村の者にはなれませんよっていうのがある。もっとこうすればいいっていうような情熱ってのは気持ちの中から離れて、出来るだけ村の行事とか伝統から離れて、どうぞ好きにやってくださいって今はなっちゃってるなってのが正直だね。だけどこの村を何とかしなきゃいけないし、盛り立てていかなきゃいけないしっていうことはある。(Y.K 氏インタビューから)

この活動をすることで人口流出を防ぐ、都市とつながる、大井沢のアピールにつながるという意見がある反面、活動の先が見えない、最終的には村の一員になれないため好きにやってくださいという意見もあることが分かった。その他にも「田舎活、大井沢流とは何なのか」「人が来ると嫌な人もいるから、周りの人と十分にコミュニケーションをとったほうが良い」といった意見があった。
田舎活は移住者を呼び込むための活動でもあるが、移住者と住民との間にある壁がこの活動にも影響している。

５．７． 西川町役場、町政策推進課に対する調査

西川町役場には、〈移住サポートセンター〉が存在する。〈移住希望者が移住先として西川町を選んでいただけるよう〉また〈移住後に西川町でスムーズに定住できるよう〉移住者が気軽に相談できる場所であり、また移住者受け入れの中核となって情報発信や受け入れ対策などを行っている。主な役割として、【移住相談】【移住希望者への情報発信】【移住希望者の生活基盤設備】【移住希望者の事情に合わせた受入調整】等がある。今回は主に生活基盤設備にあたる住居と子育て、また地域おこし協力隊についてと移住サポート全体について調査した。

住居に関する支援として、空き家バンクがある。これは空き家紹介であり、町内の空き家の有効利用を通して本町への定住を促進するために、空き家の情報を登録し、利用希望者に情報提供と連絡調整を行っているものである。平成２４年度から開始されたが、空き家の登録件数が少ないのが現状である。原因として次のように話している。

家の中にまだ荷物があるとか、時々里帰りというか季節的にくるというのがある。問い合わせはたくさんあるが、実際に利用されるまでに現場を見たりとか、何回か相談したりとか、空き家だけでなくて移住とか生活するための支援なんかも当然必要になってくるので、相談にかかる時間の方がかなり大きい。（町政策推進課インタビューから）

このように問い合わせはたくさんあるが、実際に利用されるまでにかなり時間がかかることが分かった。またこの支援はいくつか問題点がある。

1つは、ホームページに空き家の値段が色々と書いてありますけど、だいたい100万から200万前後の値段設定になっていて、基本的にある程度収入のある方って1軒家を自分で建てて住もうという考えの方が多いかなと思うんですけど、逆に100万、200万で家が買えてしまうというところもあるので、収入の低い方が見に来られる傾向があるのかなという感じがします。なので、実際に入ってみたら滞納者だったとか。印象ですけど、民間のアパートとか民間の不動屋さんではちょっと相手にしてもらえなかった人が来ているような印象がちょっとありますね。（町政策推進課インタビューから）

という話を聞いた。それ以外にも病的な人が訪れたこともあった。そういった人は避けたいが、家の決定権は所有者が持っており、所有者側はすぐにでも家を手放したいという気持ちもあるため、問題になると分かっていても受け入れなければならないということが今まであり、実際にそれが問題になってしまったことが度々ある。引っ越してきたが、地域の人々とコミュニケーションが取れていなかったり、取るつもりがなかったりと、空き家バンクもなかなか大変という話を聞いた。また本当に来たいと思っている人は空き家バンクよりも自分で民宿に泊まり、近所の人に聞きながら家探しをする、そうしたほうがより集落に入ることができるということが分かった。このように多くの空き家があるが登録できている家は非常に少なく、家を維持・管理するにはそれなりにお金がかかるため町を出たらすぐに取り壊してしまうケースが多い。また安く家が手に入るため滞納者や病気を持った人などが家を借り、実際にそれが問題になったケースがあることも分かった。また家の持ち主と借りたい人で直接やり取りをするために、住民が知らない間に新たな住人がいることがありコミュニケーションの問題も発生している。
西川町では子育て支援が充実している。

特に保育園はすごく保育料が安い、待機児童は当然いませんし、0歳児から受け入れ、共働きが多いというのがあり町では6ヵ月から預かっている。おむつ代は2歳まで無料で、おむつ代として月3千円お支払いしている。子どもが生まれると第1子から祝い金10万円を差し上げています。そのうち3万円だけ町内の商品券で、7万円は現金。その他医療費もタダなので、環境は悪くないんじゃないかなと。
（町政策推進課インタビューから）

以上のように、保育園の受け入れ態勢や医療費など金銭面での援助が整っていることが分かる。都会に比べて子供の人数も少ないため、保育園・小学校でも少人数体制の授業であり、学力が高く優秀な子どもが多い。
西川町には今まで11人の地域おこし協力隊が来たが、定住している人がいないことが現在の状況である。

地域課題に取り組んでもらいながら、定住するための支援も併せてやりたい。来年度はさらに明確化して対応を進めたいなと思っております。町の色々な事を知ってもらいながら体験してもらい、定住を図っていく支援をしていくように変える。(町政策推進課インタビューから)

という話を聞き、また支援の充実や制度の整理が必要であることが分かった。定住につなげるためにも、募集の段階から目的をはっきりさせていく必要がある。それと定住した人をモデルにできれば、これから住んでくれる人がでてくるかもしれない。
このように多くの公的制度が西川町にはあるが、支援制度ができてから移住して来た人はまだ少ない。また大井沢に今も残っている移住者は協力隊を除いて、制度を活用して移住した人がいないことが分かった。制度を利用して移住したが、既に町を去っているケースもある。また支援の充実によって、その支援を求めて来る人が増え移住の目的が援助だけにならないようにしなくてはいけない。昔は田舎の環境や人間関係、人柄に憧れて来る人が多かったが、最近は移住するためにある程度の所得を得る必要があるため、そのあたりの支援を充実していかなければいけない。

大井沢にはこういった事業、仕事があって、このくらいの収入が得られます。農業についても、農業の規模がこのくらいで、こういった作物でこれくらいの収益があげられます、その準備としてはどういった手当がありますとか、相談支援ができますというベースモデルを作って、例えば3年間でそれを充足できるような支援をしていかないといけないんじゃないかと思っています。憧れだけでは住めないので。そこの部分がまだまだ手薄だと思う。(町政策推進課インタビューから)

こういったモデルや移住に関してのアドバイザーができればより移住しやすくなる。このアドバイザーに対して役場は、次のように話す。

移住者の人による色々な事業やイベントをやりながら、地域と繋がりを持ってできたらいいなと思っている。どちらかというと移住者と地元の人みたいになってしまうので、移住者のグループと地元とか、移住者グループが一緒になってもらうためにもそういうことをできるような環境を、仕組みづくりをしなくちゃいけない。そういうことをやることによって、支援できる体制づくりに繋がるんじゃないかと思っています。行政がいくら親身になって支援したところで、対応しきれないところがありますので、実感していただくためにも仕組みが必要なのかなと思います。(町政策推進課インタビューから)

支援が充実していても、生活していくためには住民との交流は重要になってくる。大井沢にはたくさんの移住者がいるがそれぞれ各自で来ているため、これからより移住者を増やすためにアドバイスやサポートをする機能をつくり、移住者の受け入れ体制を整える必要がある。そうすることで、新しく加わる人も相談が出来たり繋がりを持ちやすくなるのである。

５．８．まとめ

５．８．１．移住者とは誰を指すのか

住んでいた地域から他の場所に移り住むことが移住とされている。しかし、大井沢には新たに越してきた人の他に、進学のため地域を離れ生活している人や就職のために、他県へ移りそこで家を借りて暮らしている人も多くいる。しかしこの地域で移住者とされるのは新たに移り住んだ人であり、他は地元住民として捉えられていることが分かった。この捉えられ方の違いには地元要素が大きく関わっている。その場所を離れたとしても地元と少しでも接点があれば要素は強く残り、再び戻って生活したとしても移住者ではなく地元住民としてその他の住民に認識される。しかし、全く接点のない人は地元要素も弱いため、新しく来た住人は移住者と捉えられることが分かった。このように移住者かそうでないかを判断している要因は、どれだけ地元と関わりがあるかという点であるといえる。

５．８．２．視点の変化

1970年代のＩターンといえば「農業をしにくる」というものだったが、1990年代からのＩターン者はそれまでと異なったまなざしを持っている。自然や人間関係などの環境や疎外のない生活といった暮ら

し方を求めて来ることが分かった。密集した建物ではなく自然に囲まれているといった都会と違う地域ならではの環境や昔から受け継がれている伝統や行事、近所に住む人々との交流等の人間関係が中山間地域に移住してくる決め手になっている。移住後の職業は職人・インストラクター・協力隊など多様であることから、全ての移住者が農業をやるとは限らないといえる。

５．８．３．支援の充実

2000 年代から農村で起業、田舎暮らしに注目が集まりＩターン者が増加した。2010 年にはメディアで移住が主題のものが登場するなどＩターンが一般化され、支援も拡充した。その結果、支援が充実したことで移住者は増加したが、知識やお金もなく気軽に移住できるようになってしまい定住に繋がらないケースも増加してしまった。現在住んでいる地域おこし協力隊を除いて、定住している移住者の中で支援制度を利用した人はいなかった。しかし移住したが、大井沢を去った人の中には支制度を利用した人がいる可能性がある。移住者を受け入れるための支援が、どの地域でも作られ充実させていったために移住がより手軽になった反面、簡単にその場所を離れることも出来やすくなった。大井沢の現在の制度では「移住サポートセンター」や「住居」といった生活するための準備の受け入れるための入り口の支援はあるが、その後の職業（農業以外）支援といった定着に繋がる支援が少ないため、これらを充実させていくことが大切である。

５．８．４．よそ者意識と見えない壁

移住年数に関係なくよそ者扱いされる、またそういった意識を持つ住民は、移住者との交流が少ない高齢者に多いといえる。人口が減っているため移住者が必要となってくるが、今後の大井沢について積極的に考えている人にはよそ者意識がないといえる。また、地域愛が強く大井沢の未来について考えている人にもよそ者意識はない。その人にどれだけ地元要素があるのかが、移住者と住民を分ける時のポイントであり、その地域との関わりが少ない人ほど住民との間に距離が生まれてしまう。

５．９．考察

今回調査を行った結果、移住者とは誰か、見えない壁の問題、移住支援の３点が今後Ｉターンを増やしていくうえで重要であると感じた。

移住者の定義は、他の土地または国に移り住むことである。大井沢にはその地に新しく引っ越してくる人のほかに、地域を離れ生活しまた戻ってきた人も多くいる。しかし移住者とされるのは、新しく家ごと越してきた人に限られてしまっている。他の土地に移り住むという点では共通しているが、なぜ一部の人に限定されてしまうのか。そこにはどれだけ地域と関わり、接点があるのかという点が深く関係している。その地に生まれ生活していた経験がある人と、全くない人ではそこでの伝統行事の理解や住民との交流といったところで違いが生じる。経験があれば再び戻っても理解しているため支障もなく馴染むことが出来る。しかし経験がないと知らないことが多く住民との交流や町に溶け込むのに時間がかかる。その地域と関係があるのとないのでは、住民のその人に対する捉え方が変わってくるといえる。少しでもそこに住んだことがある人は移住者ではなく住人として受け入れられている。このように、地元要素の強さによってグラデーションのように分けられ、移住者と地元がはっきりと分かれていないということがいえる。

調査をする前は、移住者と住民との間で壁があるとは思っていなかった。移住をテーマに取り上げられる番組を見ても、家に招待してもらい一緒にご飯を食べるといった映像をよく見るからである。しかし、調査をしてみると移住者とされる人と地元住民の間には見えない壁が生じ、よそ者意識があることが分かった。これは移住年数に関係なく、感じているものである。移住者の話では、連絡が来ないことがある、意見を主張すると反発される、どこまでいっても交われない、地元の人はよそ者に任せるのが嫌という意見があった。よそ者は出て来るなといったことを言われ、こういった経験をした移住者は意見を言うことを拒み、町の行事等に参加してもよそ者だからという意識から繋がりには入れないと思ってしまう。大井沢には親戚が多く、町の人皆が知り合いというような環境であり、お互いのことをよく知っている。よそ者意識と親戚が多いという環境から、親戚じゃない者は外へ置かれてしまうといった考えを抱いている移住者もいることが分かった。しかし全ての住民がそのように意識しているわけではない。家を建て住所を持ってきているのだからよそ者ではないという意見がある。日頃から移住者と接し、外

部と繋がりが多くある住民はよそ者意識を持っていない、そして移住者も大井沢の一員であると考えていることが分かった。住民の中でも移住者や外部と接点のない人々が、よそ者意識を持っているのではないかと思う。移住者はいつまでも移住して来た人であり、地域のことをよく知らないのだから任せられないというような意見を持っている住民もいるのではと考える。この意識をなくすには、まず移住者も住民であると認識してもらうことが必要である。そして今後の大井沢の将来を考え、人口流出を防ぐためには移住者の力が必須であるといえる。移住者はよそ者と捉えていては、移住しても去ってしまうなど定住には繋がらない恐れもある。行事等に一緒に参加するなど移住者と住民の接点をつくり、お互いに話し合いをする機会をつくることが重要である。また地元住民にとっては当たり前のことでも移住者には経験のないことが多くまた分からないことも多い。指示をしてあげなければどう行動してよいか分からず、そこに距離を感じ孤立していってしまうことも考えられる。このようなことを防ぐためにも移住者によるサポートが必要である。長年住んでいる移住者がアドバイザーとなって新たに来る移住者をサポートすることにより、その地域のルールから行事といったことまで教えてあげることで、壁をなくすことができより地域に馴染むことが出来ると考える。

支援に関しては、職業支援や住居の紹介といった支援が必要という意見があった。移住者すべてが農業に携わるわけではないため、この場所で生活していくためにも、農業以外の職を紹介できるようにする必要があると考える。住居の支援では「空き家バンク」があるが、売り手と買い手が直接やり取りをするため地元住民が知らない間に新しい住人が住み、そこでコミュニケーションの問題が発生していることが分かった。家を手放したら、町が管理するといった仕組みが出来れば登録件数も上昇すると思う。そして町が管理して家を売ることで、町と買い手のやり取りになり、知らない間に住民が増えているという問題の解決につながると考える。多くの公的な制度があるが、実際に利用し現在も住んでいる移住者は少ない。制度を利用したが、既に町を去っているケースも考えられる。支援の充実によりその支援を求めてくる人が増え、移住の目的が支援にならないようにしなくてはいけない。大井沢の人口の１割は移住者であるが、これからも移住者増やすためには、先ほど言ったようにアドバイザーやサポートする機能をつくり、移住者の受け入れ体制を整えることが重要であるといえる。移住前の手続きから移住後のサポートまでをしてくれる人がいれば、より地域に入りやすくなる。またこのアドバイザーが、移住者と住民の間に入り仲介役として移住者をサポートしてくれれば壁の問題も解決につながるのではないかと思う。

５．１０．結論

以上のように、現在の日本では中山間地域の過疎高齢化が進んでいる。また、人口減少に伴う、過疎・少子高齢化による“担い手”の不足が大きな問題となっている。このような事態を解決するためには、移住者を呼び込むことが不可欠である。このことから調査の目的は、移住者を増やしていくために、移住者はどのようなことを理解していく必要があるのか、地域ではどんな支援をしていくべきなのかということである。

インターネット調査では、10・20 代で移住を考えている割合が約半分であり、他の世代に比べても多く興味をもっていることが明らかになった。以上のことから、移住に対して、決め手やきっかけ、移住者の層について書かれた先行研究がある。日野氏によると、移住先を決める優先順位は、「自然環境が良い」、「住居がある」、「就労の場がある」という結果になった。移住のタイミングでは、「定住先の住居が決まったら」、「今すぐに」、「会社を定年したら」、「その他」の順で挙げられ、ライフスタイルを見直そうと考えている層が増加していることが分かった。これらのことから、移住を決意するにあたっての課題は、“住まいと仕事”であることが明らかになった。また今後期待する支援策は、移住者の収入サポートと移住者の暮らしのサポートの２つが挙げられた。これは移住者同士の交流の場づくりが重要であることを意味していることが分かった。山田氏によると、移住者には典型的と思われる層がある。課題を持って実現するために移住する課題追求型、快適な自然環境の中で趣味的な活動を通して気ままな暮らしを求めるゆとり暮らし追求型、どちらとも言い切れない中間的な層だ。また移住の受け入れに期待するものとして人口減少の歯止めや税収の確保、地域活動の再生・活性化などが挙げられた。以上の研究を踏まえ、人口流出が進む大井沢で移住者を呼び込むためにどんな支援があり、移住者はどのような意識を持って移住するべきか調査した。

先行研究から調査課題を次のように設定した。移住の決め手には、その地域と交流があったという理由

が挙げられている。しかし、移住者全員が交流があるとは限らない。接点がない移住者と住民はお互いにどんなことを感じているのか。また移住するにあたり、移住のきっかけや場所の選択というのは、そこに何か惹かれる魅力があるからではないか。快適な自然環境の中で暮らしたいという希望から自然に囲まれた地域を選択する人もいる。移住の決め手が分かれば、それが町の魅力の再発見につながる。以上のことから移住の目的と、なぜ大井沢を選んだのかを課題とした。そして生活していくためには収入がなければいけない。移住しても生活が困難になれば去ってしまうこともある。仕事の支援に関して多くの指摘があることが分かっていることから、移住者が必要としている支援は何なのか、移住者を受け入れるためにはどのようなサポートが必要なのか、という点も調査課題とした。

調査課題を踏まえ、仮説を次のように設定した。きっかけについては、大井沢は自然に囲まれている地域であるため、自然環境を理由に移住してきている人がいるのではないか。移住後の支援に関して、支援制度があるためそれを利用しているのではないか。移住後のサポートは、公的なものは存在していないが、住民たちが移住者を個々で支えているのではないかと考える。隣近所に野菜を分けるといった行動は田舎ならではのものであり、大井沢にもこのようなサポートがあると考えた。職に関しては、制度が存在し、仕事を紹介すると言ったサポートがあるのではないかと考えた。そして地域と関わりがある移住者と比べて、接点のない移住者はすぐに住民と打ち解けられるとは限らないが、その地域の行事等に参加し交流をすることで徐々に距離が縮むものであり、時間がかかるがいずれは解消されるものであると考えた。

以上の仮説を立て調査をした結果、だれを移住者と捉えるかという考えが、壁の問題にも影響していることが分かった。移住者はよそ者であるとみられることがあり、意見を主張しても反発されるなどなかなか言えないことがある。意見を言おうと考えている人もいたが、移住者に対して壁を作っている住民がいる。またこの壁は移住年数に関係なく、ずっと残っている物であることが分かった。移住者というレッテルを貼ることで、町の一員であるという意識をなくし、その結果移住者の意見に対して「よそ者のくせにしゃしゃり出るな」といった移住者には任せたくないという壁の問題に繋がってくる。しかし全ての住民が壁を作っているのではなく、このよそ者意識は外部の人や移住者とあまり関わりのない人が持っているものであり、この意識を無くしていくことが移住者の増加にも繋がってくる。職業に関しては、移住の目的として農業が挙げられるが、今回の調査で移住後に農業をしている人もいたが全員というわけではなく、その地域の環境を求めて移住し仕事をしている人がいることが分かった。環境を決め手に移住していることから、これは地域の魅力に繋がると考えられる。支援に関して、調査地に現在も定住をしている移住者の中には制度を利用した人があまりいなかったことが分かった。公的な支援を利用していなくても、地元住民から、移住前に住民に声掛けをしてもらい抵抗なく受け入れてもらった、野菜などを分けてもらったといった個人的なサポートを受けている人が数名いた。制度を活用して移住して来た人もいたが、人数は少なかった。実際には制度を利用した移住者もいたかもしれないが、既に町を去っているケースも考えられる。支援の充実により気軽に来れるように、また去ることも簡単になったため定住に繋がりにくくなっていることが明らかになった。定住者を増加するには、アドバイザーが必要であるといえる。移住前からその後のサポートもしてくれる機能があれば、より来やすくなると考える。

これらの分析結果から、移住者はただのんびり暮らしたいといった理由で移住し、地元住民とのコミュニケーションを取らないのではなく、移住の目的をしっかり持ち、住民と交流をすることが重要である。この行動はよそ者意識を無くすことに繋がってくる。また移住の支援が多ければ良いというものではない。移住者が来てくれるには、定住につなげるためには、どんなものがあれば良いのか。移住者の受け入れ体制と目的を定め、サポートすることが重要である。

【参考文献】

日野正基、2013 年、「中山間地域における移住者の現状と課題 ―移住者の家計収支の観点から―」、『農村計画学会誌』32（3）、pp.360-363
内閣府大臣官房政府広報室ＨＰ、世論調査「人口，済社会等の日本の将来像に関する世論調査」
https://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-shourai/ 、2018 年 2 月 3 日閲覧
山田晴義、2011 年、「農村移住による農村再生のための計画的課題と展望」、『農村計画学会誌』29（4）、pp.414-417

６．地域ブランド化活動がもたらす効果について

―PSP 活動・田舎活・学生がもたらす影響―

石井真央 ※

６．１．調査目的

近年農村空間が消費の対象となってきている。これまでは、農村というと農産物を生産するという社会的な位置づけが主流であり、農村空間に特段の意味づけがなされることは少なかった。しかし、最近では農業体験や、観光の一環として農村体験などが注目されるようになった。つまり、農村空間を 1 つの商品として見られるようになってきているのだ。このような農村空間の商品化については、次のような指摘がある。

農村空間を１つの商品として地域住民や、またその地域に関係のある人たちがイメージ化することを、地域ブランド化という。地域ブランド化することにより、地域内の人だけでなく、多くの人が巻き込まれていくことで地域のアイデンティティが確立されるのである（田原・後藤・佐久間、2008、pp.565－566）

この田原の議論では、農村を一つの商品として見ることを指して地域ブランド化としている。また、ブランド化が進むことで、地域アイデンティティが確立されるとも指摘している。この議論から、地域ブランド化するには、地域内外の人の存在が重要であることが分かる。

大井沢地区では「大井沢パートナーシップ推進プロジェクト」という大井沢と山形大学、都市部にある大学などが連携し行う地域づくり活動が平成 28 年度から始まった。その活動に私が通う跡見学園女子大学も加わり、私も大井沢のイベントや地域活動のボランティアスタッフとして参加してきた。大井沢パートナーシップ推進プロジェクトでは、大井沢の移住を促進するために「田舎活（いなかつ)」というキーワードを作り、フェイスブックで「田舎活」アカウントを作り大井沢の情報を発信したり、移住を促す地域紹介のポスターや冊子を作り、大井沢という地域を知ってもらうための情報発信を行っている。実際に私も大井沢への移住促進のためのポスターや、移住者向けの冊子の作成に携わった。

私は、そうした大井沢パートナーシップ推進プロジェクトから生まれた「田舎活」を活用した大井沢という地域の情報発信をする活動に興味をもった。そこで、本調査においては「田舎活」という活動に焦点を当てて調査・研究をしてみたい。特に、「田舎活」という形で地域を１つの商品としてブランド化することについて、その過程で何が起き、それが地域にどのような影響を及ぼし、また、活動そのものにどのような効果が期待されているのかについて調査したい。

また、「田舎活」は大井沢地域内外の人たちにどのような影響を与えているのか。「田舎活」に対して地域住民の人々はどのように捉えているのか。さらに、「田舎活」という地域ブランド化という活動を通じて、これに関わる人たちはこれからの大井沢をどのようにしていきたいのか。今回の調査においては、以上の点を明らかにしたいと思う。

６．２．先行研究の整理

まず、以上の目的に即した先行研究について整理したい。ここでは、主に 2 つの先行研究を紹介しよう。1 つ目は、立川による農村に向けるまなざしの種類についての議論だ。立川によると、外部主体が農村に向けるまなざしは 2 種類があるという。1 つ目は「消費的なまなざし」である。これは、都市に住む消費者が農村に、観光、買い物、レクリエーション、体験、居住を提供する農村を望むものである。2 つ目は、「政策的なまなざし」である。行政が農村に政策的に活性化を仕掛ける対象としての農

※ 跡見学園女子大学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科３年

村である。以上の２つが農村にむけられている２種類のまなざしである。またこの２つのまなざしの違いは、１つ目の消費的なまなざしは人間性を回復する《いなか》としての農村に対し、政策的なまなざしは危機に瀕する《農村》である。農村空間を商品化していこうとするものと、社会的活動を維持するのが難しい地域に政策介入して地域を振興していこうとすることの違いである。（立川雅司、2005、pp18-33）

つまり、近年の農村空間に対しては、都市住民のまなざしから消費的に見るのか、それとも行政的なまなざしから政策的に見るのかという２つのまなざしがあるのだ。「田舎活」についても、どのようなまなざしに対して提示しているのか、意識して考える必要があるだろう。また、立川氏は同じ論文の中で、まなざしを通じた農村空間の商品化についても議論している。

> 農村空間の商品化とは、農村空間のもつさまざまな要素が消費の対象として、市場評価の対象となることである。そして、商品化をすることにより農村にもたらす影響として、農村は農村らしさを再構築、再提示し、農村らしさを強調する傾向が生じることと、 農業よりサービス業中心に農村の社会関係に変化が起きるのではないかと考えられる。そして、農村への消費者が増えることで、その消費者のまなざしが農村側のアイデンティティの形成につながると考えられる。（立川雅司、2005、pp18-33）

この立川氏の議論から、農村空間の商品化においては消費的まなざしの存在が大きいことが分かる。消費的まなざしに向けて、農村空間の農村らしさを再構築・再掲示・協調する。それは、消費者に農村を消費してもらうためである考えられる。また、消費的まなざしは農村側のアイデンティティの形成に繋がるとあり、農村に置いて外部の存在は非常に大きいのではないかと考える。また、こうした農村空間の商品化について、高柳氏らは六次産業化との関係で、以下のように指摘する。

> 六次産業化による農村空間の商品化の特徴として３つあげられる。１つ目は、農村空間が公的機関やいろんな人から公認されることでオーソライズ化されることでブランド化が図られること。２つ目は六次産業において、実際に活動をする町内の非農家や地域外の人々の役割が重要であること。 ３つ目は、農村空間の商品化は場所の魅力を高め、移住を促進することである。これらをまとめると、 農村空間の商品化は、外の世界とつなげる役割があると考えられる。（高柳・ドウ・木村・竹内、 2017、p.1）

この議論は、六次産業化による農村空間の商品化を扱っているが、この指摘は「田舎活」にも示唆が大きい。というのも「田舎活」は地域ブランド化の活動の一環で行われているものであるが、この議論から、地域をブランド化には外との世界を繋げる役割があることが分かるからである。また、そうした商品化を行う上で実際に活動を行う地域内外の住民の役割が重要であるという指摘も興味深い。「田舎活」の事例でいうと、地域内外の住民はもちろん、私たちのような地域外で大井沢の活動に実際に関わる者たちについては、どのようなことが言えるのか。このあたりが焦点になってくるであろう。さらに、農村空間の商品化は、その地域をブランド化しているという指摘については、ここにおいて、どのような立場の人々が、どのようにそれをオーソライズしているかという論点も導きだせる。

以上の先行研究をまとめると、以下のようなことが指摘できるであろう。まず、外部からの農村空間へのまなざしは２つあり、それは「消費的なまなざし」と「政策的なまなざし」がある。この最初にあげた消費的なまなざしには、農村空間をより農村らしくする効果があり、農村の地域アイデンティティを形成する影響がある。また、この農村空間の商品化をするにあたり、地域内外の住民の協力が必要不可欠である。こうした、地域内外の住民の協力により移住促進に繋がり、外との世界を広げる影響も考えられている。

６．３．調査課題

以上の先行研究を踏まえ、本調査においては、以下の点を調査課題として設定した。

先行研究により示したように、農村空間の商品化する動きは、地域ブランド化といえる。そうした地域ブランド化による活動によってもたらされる農村への影響は、地域アイデンティティの確立、そして外との繋がりを広げることがあげられる。また地域ブランド化をするにあたり、地域内外住民の協力は重要である。これらを踏まえ、今回の調査課題の１つ目は、実際に大井沢で「田舎活」という活動がされているが、その活動はどれだけ大井沢の住民の間で認知されているのか。また、「田舎活」に対して住民はどのような思いを抱いているのか。以上の点を明らかにしたい。

２つ目は、「田舎活」という地域ブランド活動では、移住促進を図るための活動であるが、この活動をするにあたって、大井沢に住む住民や大井沢の外に住む人たちは、どのような人がどのような思いで関わっているのか。大井沢地域内外で「田舎活」に関わる人達の意識の差も明らかにしたい。

３つ目は、「田舎活」という地域ブランド化の活動を通じて、大井沢内外に住んでいる人たちが大井沢のためにいろいろな事を考えてきたが、そうした活動の中で関係者の地域アイデンティティの変化はあったのか。そして、「田舎活」という活動によって大井沢地域自体に変化があったのか。以上の点を明らかにしたい。

６．４．仮説及び調査概要

上記の調査課題について以下のような仮設を立てた。

1 つ目の調査課題に対し次の仮説をたてた。これまで活動に関わる中で、既に、大井沢という地域の中で、「田舎活」という活動に対して、住民全員がその活動に対して肯定的ではないことが判明していた。しかし、そういった地域をブランド化しようとする活動に肯定的ではない住民は、地域アイデンティティが薄いのではない。その「田舎活」という地域をブランド化する方法に疑問を抱き、肯定的になれないのではないか。

次に、調査課題の 2 つ目、3 つ目に対して次の仮説をたてた。「田舎活」という地域ブランド化の活動を大井沢に関わる住民が集まり、それぞれが協力しあいながら行っている。それにより、仲間意識が芽生え、「田舎活」を行うメンバーの関係性が密になってきているのではないか。また、「田舎活」を行っている大井沢住民のメンバーは、地域ブランド化の活動で、他の地域に住んでいる人に大井沢という地域に来てもらう、又は知ってもらうために、活動を通して改めて自分の住んでいる地域を見直す機会になっていると考える。そのため田舎活のメンバーは、大井沢地区の魅力を再発見や再確認をしたり、そして大井沢地区をより良くするための課題を見つけ、その課題の改善につながっているのではないだろうか。

以上の仮説をもとに、調査を実施した。予備調査では、2017 年 7 月 15 日～16 日に行われたふるさと保全活動という名の草刈りの活動に参加し地域住民の人達と交流しながら調査を行った。本調査は、2017 年 9 月 4 日～10 日にかけて、このテーマにかかわる関係者 17 名にインタビュー形式で行った。なお、インタビューは一人あたり 60 分程度実施したが、対象者との話が盛り上がり一部は 120 分に至ったものもある。また、調査の一環で、9 月 9 日の例大祭前夜祭および 9 月 10 日の例大祭に参加し、地域の方々と交流を深めながら調査をした。また、9 月の調査で足りなかった部分は、1 月 13 日に行われた大井沢パートナーシップ推進プロジェクトの会議の時にインタビュー調査を追加で行った。

６．５．調査結果の概要

調査結果の詳細の分析に入る前に、結果について簡単に提示しておきたい。今回の調査で次の 3 つのことが分かった。1 つ目は「田舎活」という活動に対して、住民全体が総論としては肯定的ではあったが、個別の活動内容などに関しては肯定的ではなかったことである。これについては、仮説のとおり、疑問や不満があるのは、その活動そのものや方向性ではなく、手法や細かい内容なのであった。また、

こうした対象者は手法に対する代替案も持っており、今後の活動に貢献する可能性があるような意見も多くあった。2 つ目は、田舎活という活動によって実際に大井沢地区が外の世界と繋がりを持ち、そして、メンバー間での関係が密になってきたことが分かった。

そして、3 つ目は学生ボランティアの在り方についての課題である。今回の調査では本来地域ブランド化についての活動についての調査であったが、「田舎活」について調査をするにあたり、大井沢地区で行われている他の地域ブランド化ではない地域活動と比較をするため、地域活動についても併せて調査を行った。そこで活動人口低下についての話があり、その要因に学生ボランティアの存在も入っていることが分かった。理由は、学生が労力として住民の代わりとなってイベントに参加するようになり、イベントは学生が変わりにやってくれるから大丈夫といったイベント継続の安心感が、イベント継続の危機を感じにくくなっているからであるということである。またこうした住民主体のイベントが、住民が参加せず学生ボランティアの場所となってしまい、学生ボランティア主体のイベントに変わりつつある。このことから、今後のイベントなどの学生ボランティアの在り方を考えていかなければならないという課題が見つかった。

以上の 3 つの事が今回の調査を通して分かったことである。詳しい事は、以下の分析・考察の項目で説明したい。

６．６．調査結果の分析

６．６．１．大井沢とはどういう所なのか

まず、地元住民が見る大井沢と、移住者が見る大井沢では、それぞれ違う見方があるのではないかと考え、それらの違いを明らかにするために「大井沢とはどのような所だと思いますか？」という質問を設定した。これについて、回答を簡単にまとめると以下のとおりである。

表 6.6.1-1　地元住民が見る大井沢

対象者	大井沢についての語り
ST 氏	良いところではあるけど不便である/自給自足
TS 氏	景色が良い/暮らすのに大変な部分もある（冬）
SR 氏	自然が多く/何もない
DK 氏	生まれてきた所/自然が多い所
DI 氏	山に囲まれている田舎/空気がきれい
SK 氏	歴史あるところ/自然に囲まれているところ

表 6.6.1.-1 からは、不便であるが住みやすいと矛盾した答えがあるが、大井沢の住民からすると慣れもあるだろうが、不便と住みづらさは別物であることが考えられる。

表 6.6.1-2　移住者が見る大井沢

対象者	大井沢についての語り
TI 氏	自然に囲まれたところ/雪原が多い
YK 氏	蜘蛛の巣のような親戚/自然があって景色が良い/動植物が豊か
BN 氏	人が良い/自然が多い/無料のセコムとかに入っているみたい（住民に監視されている）
YH 氏	何もない/自然が多い
TT 氏	人づきあいが濃密である/家父長制度が強く残っている/文化レベルが高い

表 6.6.1-2 の表からは、大井沢の人間関係についての指摘が多い事が分かる。また、自然に関しても指摘が多く、これは移住する前の場所と比較して答えているのではないかと考えられる

上記の表を見ると、「何もなく不便なところ」、「自然に囲まれていて、自然が多いところ」と答える人は移住者、地元住民ともに多かった。また、「地元住民のつながりの濃さ」について答える移住者の人が多いことがわかった。移住者である YK 氏は以下のように言っていた。

冠婚葬祭なんかがあると、そのお付き合いも全部親戚づきあい、だから親戚じゃないものってのは外に置かれちゃうわけ。そういうね無念さ、大げさだけどそういう立場にならざる得ないということに感ずるわけね（YK 氏のインタビューより）

地元住民のつながりについては、冠婚葬祭や、地域のイベントなどで強く感じることがあることがわかった。また移住者であり、町内会長をやっている MK 氏は「俺はいつまでたってもよそ者だ」と言う。この方は大井沢に移住して 20 年以上も経ち、そして今は町内会長までやっているのだが、未だよそ者という意識があるという。この言葉は他の移住者や地元住民にインタビューをしたときに聞くことがあった。そうしたことから、先ほども書いた「地元住民のつながりの強さ」が、移住者たち自身のよそ者意識を強くしているのではないかと考える。また、他に、昨年地域おこし協力隊として移住した BN 氏から興味深い話を聞いた。

無料のセコムとかに入っているみたい。みんなすごい関心を持つ、村中が。だから言い方悪いけど監視されているからさ。それにはびっくりする。ある意味ちょっと怖いけど、それが田舎生活には関わってくる 1 つなんだろうな。鍵を開けているから、みんな、勝手に入る。女 1 人暮らしだから鍵をするでしょ、ガンガンっていきなり音がするから。それくらいかな。(BN 氏のインタビューより)

BN 氏が言っていた「無料のセコム」という言葉。これは大井沢というより、田舎という場所を上手く表現していると感じた。地域の人がみんな新しい人を注目しており、ある意味みんなで見守っているということがわかる。

また、これに関連して、私自身の経験を一つ示せば、一昨年にインターンで西川町内に宿泊した際、家主が「家の鍵は閉めない」と話していた。当時、私はそのことに随分と驚いたことを覚えている。そして、地域の人があまり鍵を閉めないということをその時に知った。それは田舎の特徴の 1 つであると考える。それが今回 BN 氏の話で証明されている。私が住んでいるところは、家の呼び鈴を押して、相手の返事が来てから「ごめんくださーい」と人を呼ぶが、田舎の場合は、呼び鈴をおさず扉をあけてそのまま「ごめんくださーい」と人を呼ぶ。基本的に田舎ではあまり呼び鈴という概念がないと考えられる。これは、大井沢もその形があるため、田舎らしさあふれる田舎であるということがうかがえる。

６．６．２．大井沢という地域の魅力について

大井沢の魅力もまた地元住民、移住者のそれぞれの大井沢の魅力を感じているのではないかと考え、それらの違いを明らかにするため、6.5.1.の調査結果を踏まえた上で、「大井沢の魅力はどこにありますか？」という質問を設定した。これについて、回答を簡単にまとめると以下のとおりである。

表６.６.2-１　地元住民の思う大井沢の魅力

対象者	大井沢の魅力
ST 氏	人の良さ/自然/住みやすい
TS 氏	なにもないとこ/農業をするにあたっての気候が良い
SR 氏	雪景色/不便が楽しみになること
DK 氏	何もなくあえて不便なところ
DI 氏	四季折々を楽しめるところ/親切で明るくて働き者がたくさんいること

表 6.6.2.-1 からは、地元住民だからこそ地域の場所的な事が多かった。何もないといいながらも、それが大井沢の魅力であることを地元住民は考えていることが分かる。

表６.６.２-２　移住者が思う大井沢の魅力

対象者	大井沢の魅力
TI 氏	自然に囲まれたところ/色んな事ができること/色んなお祭りがあること
MK 氏	歴史が深い/出羽三山信仰に関係した土地/生活するには大変なところ
BN 氏	自然/都会にない田舎らしさ
YH 氏	何もなくあえて不便なところ
TT 氏	大自然が身近にあること

この表からは、表 6.6.2.-1 にはなかった祭りや歴史というような、文化的な面の魅力を移住者はあげていることが分かる。

以上の 2 つのを比べてみると、6.6.1.の質問で答えた「不便なところ」、「自然が多い」の二つがこの質問の答えにも多く、それらが住民、移住者共にこの地域の魅力と思っていることが分かった。

本来ならば「不便なところ」と聞くと地域のマイナスなイメージになりやすいが、しかし、そのマイナスなイメージが、逆に大井沢の魅力となっている。また「不便なところ」と移住者や地元住民に言われているところから、大井沢は中途半端な田舎でないことを表していることが分かる。移住者の中にも、この大井沢の中途半端ではない田舎を求めて移住を大井沢に決めた人もいる。そうしたことから、大井沢のその中途半端ではなく、田舎の中の田舎といえるような不便さは大井沢の魅力の 1 つであると言える。

６．６．３．田舎活の認知について

平成 28 年度から始まった大井沢の地域づくり活動の一つである田舎活という活動に対して、大井沢の住民はどれくらい認知されているのかということを明らかにしたいと考え、まず「田舎活という言葉を知っていますか？」という質問を設定した。

結果は、調査対象者全員が田舎活という活動を行っていることを知っていた。比較的新しい活動であるため、あまりこの活動を知られていないのではないかと考えていたが、それは違っていた。しかし、地域で行われている新しい活動に関して、今回は名前だけでも全員が知っていたことから、こうした活動に対して全く興味がないということはないのではないかと考えられる。もし、全く興味がなければ、そもそもこの田舎活という言葉を知られていないと考える。以上のことから、住民は田舎活という活動に対して少なからず関心を持っていると言え、どのくらいの関心を持っているのかに関しては次の項目で分析したい。

６．６．４．田舎活の活動内容の認知について

前項の結果から、調査対象者全員が田舎活を知っていることが分かった。では、田舎活という活動が住民の間でどの程度関心をもたれているのかを明らかにするため、「田舎活ではどんな活動を行っているのか知っていますか？」という質問を設定した。すると、以下のような答えを得ることができた。

> うんだいたいだけどな。一番知ってるのは東京行ってたな。あとは GM 君がこっちきてなにかやってるよなぁ。やっぱ土地住んでほしいっていう魅力を発信するっていうか、そういうことかなって思ってます。(ST 氏のインタビューより)

ST 氏のインタビューからは、東京実装の事や、GM 氏が行っているワインのための葡萄の木を植えている活動について知っているようである。また、田舎活の目的を理解していると考える。

DR さんだの、若い人だのが取り組んで、田舎活って大井沢に住んでみませんか？東京のほうに発信して、田舎の暮らしをしてみませんか？って若い人が移住できるような体制をつくってるんだよね？
（TS 氏のインタビューより）

TS 氏のインタビューからは、活動内容を一応理解しているようである。しかし移住受け入れの体制づくりについて指摘があるため、現段階の田舎活の活動ではまず大井沢の情報発信であるため、少しずれて理解をしているのではないかと考えられる。

田舎活、ホームページがあって大井沢のことを宣伝しているってことくらいだな。あれはだって西川ぐらしと一緒でしょ？西川ぐらしは町でやっているやつだけど田舎活は大井沢でやっている。
（MK 氏のインタビューより）

MK 氏のインタビューからは、活動内容については分かっているようだが、しかし、西川町で行っている西川暮らしと同じ活動であるとみられていることが分かる。

以上のインタビュー結果より、田舎活という名前は一応知っているが、活動内容については知っている範囲、理解についてバラつきがあることが分かる。また、具体的に内容を把握している人は少なく、田舎活メンバー以外の住民からすると、ただなんとなく移住関係の事をやっているというような理解なのではないだろうか。また、この質問をしたときに、インタビュー相手から逆に「この田舎活って何なのか、説明してみて」と質問をされることもあった。

このことから、田舎活という活動に対しての関心も人によりバラつきがあることが分かる。では、何故こうしたバラつきが出るのかを 7. 6 .6.の項目で分析したい。

６．６．５．田舎活を通しての変化について

先行研究により、地域ブランド化を行うことにより、地域内外の繋がりが広まったり、地域アイデンティティの形成に繋がるなどの、地域に何かしらの変化が起きること分かった。では、実際に田舎活という活動を通して地域全体や、それとも個人レベルに何かしらの変化が起きたのかを明らかにしたいと考え、「田舎活を通して何か変化が起きましたか？」という質問を設定した。田舎活のメンバーである TT 氏にこの質問をしたところ次のように述べていた。

自分自身で言ったら、個人的に焼き物を通して名前も大井沢焼きってつけてもらったっていうのもあるし、行った先々で大井沢っていう場所が分かってもらえるように、知ってもらえるようにっていう思いではずっといたので、1 人じゃなくてみんなでやってくれてるっていう背中を押してくれてる感とか安心感みたいなのはある。大井沢の田舎活のメンバーの中でも、大井沢外での交流っていうのが今までよりも積極的になってきたんじゃないかなって思う。GM くんたちの影響っていうか、力は非常に大きいと思います。（TT 氏のインタビューより）

TT 氏のインタビューより、田舎活という活動をメンバーと一緒に行ったことにより連帯感が生まれ、今までよりも関係が密になってきていることが分かった。これは、田舎活という活動を通して仲間意識が芽生え、関係性が密になるという仮説が検証されたのではないかと考える。そして、田舎活という活動を通して、大井沢の外へ行った GM 氏を通して、地域内と地域外でのつながりが出来てきている

ことが分かった。また、田舎活を通しての変化についてだが、移住者である YH さんから次のような事を聞いた。

私の友達が目黒の何とか線の駅前で、大井沢のポスター見たんだって。田舎活のすゝめていう。ポスター二枚くらいが張ってあって、DK とか誰かの顔がでかでかとでてるんだけど、これってなんですかってメール来た訳。（YH 氏のインタビューより）

田舎活を通しての変化という今回の論点からは少しずれてしまうのだが、東京実装の時にそれぞれの場所に掲示した田舎活のポスターを見て、YH 氏の友人が YH 氏の方に問い合わせをしていたことが分かった。この事から、田舎活で作ったポスターを見てくれている人がいるということが分かる。ただ今回は、たまたま移住者の友人であったため、大井沢という地域を知っていたため問い合わせが来たのではないかと考える。

６．６．６．田舎活に対する認識について

田舎活という活動が始まって 1 年が経ったが移住に関しての成果はまだない。しかし、現段階で地域住民の人からこの活動を見てどのように思われているのか、そして田舎活のメンバーの人はどのように思っているのかを明らかにしたいと考えた。また、その答えによっては、地域住民が田舎活という活動に肯定的になれない理由、そして活動メンバーとの意識が分かるのではないかと考え「田舎活に対してどのようにお考えですか？」という質問を設定した。以下のような答えが返ってきた。

分からないよな。本当に知ってもらうってだけだったらね、良いかもしれないけど、住んでもらうってなったら、なかなか大変だなぁって思う。住んでもらうって簡単にはいかないと思う。難しい仕事ではあるよね。宣伝だけじゃなくて住んでもらうところまでやるっていうのは、最初は興味をもってもらうところからやらないとだしね。長く続けないとダメだと思うね。簡単にはいかないことだもんね。(ST 氏のインタビューより)

ST 氏のインタビューからは、活動に対して難しいと考えているようだが、しかし、全て否定的なわけではないことが分かる。

移住してきた人が動いているのは凄く良いし、DR 先頭に年代の人が危機感を持って動いていることは高く評価している。ただ、正直言って、田舎活って言ってるけど、それって何。あなたは、私に説明できますか？誰が作ったかしらないけど、Facebook で「大井沢流　田舎活のすゝめ」ってあるけど、大井沢流って何？ね？そういうのがストンって抜けて独りよがりなの。じゃぁそういうのは誰に向けて発信してるの？自分たちのターゲットが誰なのかを決めなきゃでしょ？不特定多数なんだろうけど、不特定多数のなかでもこういう人たちに見てもらいたいってあるはずなんだよ。なきゃおかしい。だからそれがね、見えない。だからあの、ああいう事をするなら、発信する側は、受け取る側をイメージしないと、何もないし無駄だよね。（YH 氏のインタビューより）

YH 氏は活動を行っていることに関しては評価している。しかし、活動内容については、疑問を多く持っていることが分かる。

そう、やっていることは同じっていうか、効き目あるのかなって。 正直ちょっとね、西川ぐらしとダブってやっているからもうちょっとこう実効性なくても、そういう希望者とかは西川ぐらしの方でちゃんとサポートみたいにして実際の作業とかやって、当然町の税金でやっているから、 田舎活って別に町の税金

は全く入ってないし、資金的にもそんなにお金かけてやっているわけじゃないから、ソフト面でいうかそういう宣伝とかそっちを一生懸命やって、そういう興味ある人は西川ぐらしの方に応募してくださいっていう。住み分けっていうかそこもちょっとはっきりしたほうが。田舎活は大井沢の宣伝。すごくいい活動しているとは思うんだけど、実績があまりまだない。（MK 氏のインタビューより）

MK 氏も YH 氏同様活動を行っていることに関しては評価してくれている。しかし、活動内容について疑問を持っていた。

良いんじゃない、ああやって町に行って活動するのは。俺も行ったことあるけど。悪いことも言っておかないと、虫が多いとか。虫が嫌いな人はね～。ただその目的によるよね。農業という目的があれば、それに向かって来れるし。ただやっぱりちゃんと話をするべきだと思うね。なんでも。その時に良いことばかり言わないで、冬のこととか、冬はどうやって越すのか。農業も。そこまで面倒見れない、町だって。それは自分で何とかするしかないから、それができる人でないと住めない（TI さんのインタビューより）

TI 氏も活動に関してはさほど否定的ではなかった。しかし、活動をするにあたりちゃんと事実を伝えるべきという意見を持っていた。

田舎活もやっていていいとは思うんだけど、私は田舎活やりましただけだと思っている。そのあと例えば 3 年後、5 年後目標として移住者 3 人って決めないとやっているだけだったら多分来ないと思う。厳しい意見かもせれませんが、根本がぐらついてると多分だめだと思う。根本からずれているような気がするの。（BN 氏のインタビューより）

BN 氏も TI 氏同様活動に対して否定的ではなかった。ただ現段階の活動の方針に関して思うところがあることが分かった。

以上 5 人のインタビューより、田舎活という活動をやっていることに関しては好印象を持ってはいるが、しかし、活動の内容ややり方に関して疑問を持ち、そのため結果的に田舎活という活動に対して厳しい意見を持つ人が多い事が分かった。これは、地域ブランド化活動に肯定的になれないのは地域アイデンティティが低いのではなく、活動内容に疑問を抱いたため肯定的になれないという仮説の検証がされたと考える。また、移住の情報発信に関しての意見は移住者に多く見られ、移住者だからこそ思うことだと考える。このような厳しい意見がある中、田舎活のメンバーは以下のように答えていた。

いや、あの、大井沢自体が生きる道はそういう田舎活をして、他からこう入っていただくしかっていうか、いただくのがここが残っていく、最善かなぁ・・・まぁ一つの方法だからねぇ・・・
（DK 氏のインタビューより）

DK 氏は大井沢の現状を知った上でこの活動に取り組んでいるため、田舎活に大井沢をかけているのではないかと考えられる。

これをやっていることで人が、I ターン者が直接的に増えるということにはなかなか繋がらないかなと思っているんだけど、やっぱりすることによって例えば、GM くんとか東京で頑張っている若い連中が繋がってそういう人たちが西川町大井沢っていう場所があるんだっていうことを知ってくれる、まずそこが大事なんじゃないかな。山形は知っててもも月山は知ってても西川町大井沢ってなにっていう話になってくるし、知ってくれる人が増えると興味持ってくれる人も増えてくるだろうし、その中からもしかしたら行ってみたいとか、来たら来たで住んでみたいとかっていう人が出てくるかもしれないね。まずは都市部の人と大井沢の人たちが直接繋がるツールとしては田舎活っていうのは非常に有効なんじゃないかなと思う。今までも 10 年

間いて感じたのは、やろうって言ってやるんだけど、その時だけで終わることが多々あったので、続いてる方じゃない？（TT 氏のインタビューより）

TT 氏は田舎活という活動の移住促進への効果についてはあまり見込めないということを言っている。しかし、移住促進に繋がらなくとも、まず大井沢が外と繋がることがだいじなのではないかという指摘をしていた。

田舎活のメンバーの中には、人口減少・高齢化していってる現段階の大井沢に危機感を持ち、それを打開する方法として田舎活という方法にかけている人がいるということが分かった。また、否定的にとらえる人はおらず、活動をやっているだけあり、田舎活という活動を肯定的にとらえて、活動していっていることが分かった。

６．６．７．田舎活に対する改善点について

６.６.6. の質問の答えと被るところがあるが、この質問から実際に田舎活に対してどんなことが必要で、また前項で聞きだせなかったような、住民が田舎活に対して思っていることが具体的に明らかになるのではないかと考え、「田舎活に関することで何か改善点はありますか？」という質問を設定した。前項では、「長く続けること」や「西川暮らしとの違いをはっきりさせること」、「目的意識をもつこと」などの指摘が挙げられた。他にあげられた 5 つの指摘は以下で紹介したい。

①　インターネットの情報発信について

現在、田舎活で行っている活動の中には Facebook やインスタグラムなどの SNS を使った情報発信がある。その SNS を使った活動内容に対して、元マイクロソフト社に勤務していた移住者は以下のように指摘していた。

私もさ、たまに見るんだけど、情報は更新されないは、書いてる側の顔が見えない。山形大学の人が手を加えてるように見えるし。それが編集責任者が誰かって明確になっていないと情報としては面白くないんだよね。そういう赤の他人が、あれはだめこれはだめってやると面白くない、生きた情報にはならないんだよね。で、あの、大井沢だよりを写真に撮って載せたところで面白くないし誰も読みやしないよ。だから文面も一つ一つこうしてってやるのならわかるけど。だからあの、全面を撮ってのせるくらいなら、一つ一つを写真に撮って丁寧に説明する方が良い。やっぱり情報を発信する側に責任はあるだと思う。わざわざ身に来てくれた人たちが、また同じ写真だっていうんじゃもうさ、見にいかないよね。大井沢をインターネット発信したいって言われたとき、誰が責任とるんだって、誰が書くんだって、あとは三日に一回どんなに間が抜けても 4 日に一回更新できないとだめだよ。一週間更新できなかったらアクセス数は半分になるんだよ。2 週間ほったらかしにしたらその半分。一か月更新しなかったら、誰も見に来ない。だからその、インターネットに情報を発信すれば世界中の人が見に来るっていう馬鹿な寝違いがあったのね。でもさ、歌舞伎町の裏通りに店だしたって誰も来ないでしょ。表通りだから見に来るんでしょ。その裏にも面白い店があるんだよってしってもらうには、面白い事やって時間をかけないと、客なんか来ない。だからインターネットに店を出すってそういうことだ。それこそ口コミの世界だからね。どっかから突っ込みが入った時にそれを受ける人間がいなきゃ。無視してもいいし、反論してもいいし、そういうことを出来る編集責任者がね、ネット上のメディアだからって、第三者別の人に任せても、生きた情報にはならないと思うなぁ。例えば、大井沢田舎活を紹介して、興味をもってもらおうってそれなりの覚悟は必要だと思う。（YH 氏のインタビューより）

YH 氏は大井沢に移住した時、自分でブログを開設し、大井沢の情報を発信していた。もともとそのブログは、東京にいる友人に自分の情報を発信するためのツールだったのだが、色んな人の目に止めら

れ、ある種の人気ブログになっていたのである。しかし、そのブログに悪質なコメントをする人が多くなったため、今はブログの更新をやめてしまっている。多少厳しい意見ではあるが、人気ブログを書いていたからこそ、情報の発信については思うところが多く、現在の田舎活の FB を使った情報発信のやり方に疑問を持っていることが分かった。また、その情報発信をする上で必要な事として、上記では主に責任者をはっきりさせることと、情報発信の頻度についてだが、他にも、もう一つ重要な事を次のように述べていた。

あなたたちが面白いっておもえるものは、見る方も面白い。あたりはずれはあるだろうけど、あなたたちから見て面白いと思えるものは面白い。中の人達は、嫌いなところとか素晴らしいところとかは生まれた時から見てるから、感動がないんですよ。（YH 氏のインタビューより）

この文頭にある「あなた達」というのは、私たち学生含めた大井沢に住んでいない外の者や移住者のことである。YH 氏は情報発信をする上で、2 つ目に外の人の目を、関心を意識しながら情報発信をすることを指摘していた。

③　体験させてみる

大井沢という地域は、6.5.1.の項目でも答えたように、自然があって綺麗なところではあるが、実際に住むとなると、不便で生活が大変な地域である。そうしたこともあり、実際に移住してきた TI 氏は以下のように言う。

どういう状況とか。だからやっぱり来てもらうことが一番だから、冬も。冬来てもらって宿とかに一か月間住めるような、体験できるとかそういった場所が必要だと思う。それでそこにちゃんと来てもらって、冬も夏も秋もずっと、１週間でも２週間でも一緒に住んでもらって、そういう田舎活をするなら。勝手に来る人は別に問題ない、みんな勝手に来た人だから、今住んでいる人はほとんど。住んでいる人は覚悟というかそういうつもりで来てるから、ある程度分かっているけど。何もわからない人を引き受けるのであれば、そういう活動も必要。（TI さんのインタビューより）

大井沢という豪雪地帯で住んでいくことは難しく、そのことをちゃんと伝える方法は、実際に体験させてみる事がいいのではないだろうかという事である。実体験をすることにより、大井沢の冬の厳しさも分かり、その他にも実際にどんな人が住んでいて、また何が移住する際には何が必要なのかなどを知る機会になる。以上により、実際の大井沢を実感してもらうために、短期間でもお試し宿泊のようなかたちで、大井沢を体験させてみることが重要であると考える。

③　事実を伝えること

①でも述べたように、田舎活では SNS を活用した情報発信を行っている。そうした情報発信を行う上でどんな情報を発信するのかに対して、移住者の 2 人は以下のように述べている。

情報発信しても雪の楽しいところが発信してあって、嫌なところってあまり情報発信しないから、そこが肝心。(TI さんのインタビューより)

TI 氏は情報発信をする上で、良い面だけではなく悪い面も伝えることが重要であることを言っている。

今までの人たちは協力隊とかでは来ていないから自分で根から掘り起こして今の地位はやっているんだけど、やっぱりそこの苦労話を聞かないといけないと思うし、苦労が愚痴かもしれないけど、そこは聞かないといけないところで、良い面ばかりしか言わないのは、あんまりどうかなと思う。

（BN 氏のインタビューより）

BN 氏も TI 氏同様悪い面も伝えるべきであることをしていた。

以上の指摘は、大井沢に限った話ではなく、移住促進活動などをやっているところすべてに関わることである。地域に移住をしてもらいたいのであれば地域の良いところだけでなく、悪いところ、大変なところもしっかりと外の者に伝えるべきである。現段階の田舎活の FB やインスタグラムなどに載せているものは、大井沢の良い面ばかりであり、大変なところは具体的に載せていない。そうしたものを載せないことにより、実際に移住してきた際に思っていた地域と違うというようなギャップが生まれると考えられる。また、そのギャップから定住に繋がりにくくなるのではないかと考える。そのためにも、この「事実を伝える」ということはとても大切なことで今の田舎活に必要な事ではないだろうか。

④　住居

まず、現在の田舎活の活動において、住居の斡旋などの活動は行っていない。しかし、この調査から住民の間で田舎活に対して住居の斡旋も必要であるという意見があったので紹介したい。

田舎活制度には家の保証がまだ足りてない。やっぱり住まいにするところ、本当は仕事にすることまででも大井沢で仕事っていうのは無理だからよ、仕事は自分で探しながらってことになるんだけどよ。住まいにするころだけは大井沢で提供できますって体制まではちょっとは違うのかもしれないなぁ（TS 氏のインタビューより）

TS 氏は田舎活で住居の斡旋を行うことに多少迷いながらも、住居の斡旋が必要なのではないかと考えていることが分かった。

結局住むってなった場合住居の斡旋もちょっとゆるいかなあぁって気はする。（OK 氏のインタビューより）

田舎活というよりかは、西川町での移住制度に合わせて述べているのだが、やはり移住促進を行う上で住居の斡旋は必要であること指摘している。

先に述べたように、田舎活に住居や職などを用意することが大切なんじゃないかという意見が度々あった。しかし、田舎活という活動は、まず大井沢という地域を知ってもらうための活動であるため、住居の斡旋というのは田舎活での専門外である。そのため、少し住民の中で考える田舎活というものがずれているのではないかと考えられる。ただ、こうした住居の斡旋はやはり移住をするにあたり重要になってくることではある。現在は町の役場の方で住居の斡旋を行っているものもあるので、そういった所と提携しながらやる必要もあるのではないかと考える。

④　　その他(活動メンバーの意見)

①～④までは、大井沢の住民の意見であったが、ここでは実際に活動を行っている田舎活のメンバーの思う改善点を紹介したい。回答を簡単にまとめると以下の表のとおりである。

表 6.6.7.　田舎活メンバーの思う改善点

対象者	改善点
DK 氏	SNS を活用するのはいいけど、出来る人出来ない人との差をうめるべき
SK 氏	慌てずに、根気よく粘り続けていかなければならない
TT 氏	他の都市とも繋がりを作ってみてもいいのでは。視野を日本だけでなく海外に向けてもいいかもしれない/映像を作るとか面白いとは思うけど、プロ抜きでやるのは難しい。

まず、DK 氏の SNS 活用についての指摘だが、田舎活のメンバー全員が若い訳ではない。時代の流れなどもあり、スマートフォンを使ってはいるが、なかなか使いこなせていない人もいる。スマートフォンを使いこなせている人が進んでそういった SNS を使うのはいいが、使えない人は取り残されていってしまうことを指摘していた。この使える人使えない人の差が開けば、田舎活を行うメンバー内でのモチベーションの差も開いてきてしまうのではないかと考える。そのため、使えない人にもちゃんとやり方を教えながら、協力して行っていくことが重要である。

また、TT 氏の意見としては、もっと大きく視野を広げ東京だけでなく他の都市とのつながりを持つことと、一度話題に出た大井沢の PR 映像制作についてだった。今までの活動の中で東京へ行き、実際にポスターを掲示するなどをして、現在は、東京と大井沢の繋がりを持ち始めたところである。しかし、まだ他の都市で活動を行っていないので、少しずつ他の都市でも行うべきであるという指摘であった。大井沢の事をもっと多くの人に知ってもらうためにも、他の都市に進出していくことは重要であると考える。

６．６．８．地域活動に対する考えについて

現在、大井沢地区で田舎活と同時並行で行われている地域活動はいくつかある。田舎活以外の地域活動に関して、住民がどう思っているのかを調査することにより、大井沢が抱えている根本的な地域活動の問題点を明らかにできるのではないかと考え、「田舎活以外の地域で行っている地域活動に対してどう思っていますか？」という質問を設定した。また、ここでは移住者、地元住民の両者に調査し、以下の答えが返ってきた。

> 町内会関係なく若い人達や学生たちが神輿を担いだりしていて例大祭は盛り上がっているが、秋祭りは地元の人の参加が年々減ってきているので、これからどうしていったらよいのかが課題である。また、雪まつりの時はひとがたくさん参加していたのだけど…(DI 氏のインタビューより)

DI 氏は、地域の活動人口の低下に関して問題意識を持っていることが分かる。また、過去に行われていた雪まつりの時との比較をして、多くの人が参加しなくなってきたことが分かる。

> 大井沢の活動に人数、活動人口ってのかなやってる人が少ないのよ。まず非常に高齢化になってるので50%以上いってるんだな。昔頑張ってくれてた方だったけど、意見は色々聞くけど、実際はなかなか難しい。じゃあ若い人っていったら若い人はいない。だからその活動、一緒に活動できる人が来てもらって一緒に活動をしたい。(SK 氏のインタビューより)

SK 氏も DI 氏同様、活動人口の低下について触れていた。

> 活動に参加する人はするけど、しない人はしない。そういう人はどの地域においても必ず一定数はいる
> (TT 氏のインタビューより)

TT 氏は、活動に参加しない人はどこでも一定数いることを示した。

霜祭りとか風祭とかあるっていったけど、全部の町内会であるわけじゃなくてよ、それが町内会ごとになるんだけどよ。まぁ神社のお祭り例大祭、あと年度初めの神社の参拝も人来ないもんな。地元の人がね（ST 氏のインタビューより）

ST 氏は、地元の行事に地元の人が来ない事を指摘していた。

以上のインタビューから、大井沢地区では現在地域の活動に参加する住民が減ってきていることが分かる。また、地域の活動だけでなく、イベントごとにも参加する人が減ってきていることも指摘されている。また、そうした現状について、学生の存在について次のように言われていた。

村の祭りでしょ？学生さんに頼らないで、西川町の小学校の生徒を連れてきてやればいいと思うのね。（SE 氏のインタビューより）

SE 氏は現在の外の学生に頼るのではなく、同じ町の子どもを呼ぶ方がいいのではないかと指摘していた。

仕切ってるやつが悪い。なんちゅーかさ。補助金がでるから、それにおんぶにだっこになってる。それに頼って、村の人が参加しなくても行事が出来ちゃうのよ。なんもね、工夫もなくてね、学生におんぶにだっこしえもらってる。これにむらおこしもへちまもないもんだ。（SR 氏のインタビューより）

SR 氏は現在の地域活動に活動に対して工夫がないと厳しい指摘をしている。

でも、若い人がいないからなぁ。大学生の人がやってくれないと、頼りっきりになってしまってるんだろうなぁ。みこしも全員学生？DR 氏辺りは違うけどね、草刈りの時に、学生さんたちがいないとなんだべねぇって。さっきも言った関心がなくて出てこない人、学生さんがいないと、出来なくなるんでねぇべかぁって話。でも草刈りの時って結構若い人もでてきてくれるよな。（ST 氏のインタビューより）

ST 氏は、学生がいないと地域活動が出来なくなるのではないかと指摘していた。

以上のことから、大井沢地域での地域活動において学生という存在は大きく、学生がいないと地域活動が機能しないのではないかという指摘があった。また、そうした、学生に頼り切ってしまう原因として補助金について言われていた。補助金があるため、外から学生を呼んで地域のイベントを動かすことが出来ているという事である。では学生がいなくなった場合、イベント出来なくなってしまうのだろうか。また、そうした学生頼りになってしまった状況から抜け出す方法がないかを今後考える必要があると言える。

６．６．９．昔と今の地域活動の変化について

大井沢地区は、昔から地域活動が盛んな地域である。そこで、過去と現在の地域活動を比較し、それらの活動の違いには何があるのか、また、その違いが現在の地域活動における問題を解決するに何らかのヒントを得られるのではないかと考え、「今と昔の地域活動の違う所は何かありますか？」という質問を設定した。回答を簡単にまとめると以下の表のとおりである。

表 6.6.9. 昔と今の地域活動の差

対象者	昔と今の地域活動の差として語られたこと
ST 氏	決断力のある人が今はいない
DK 氏	昔は半強制的だったけど、今はそうもいかない
DI 氏	祭りに関心がなくなってきているかもしれない。学生任せになってきているかもしれない。
SK 氏	共盛会の力が強かった。
DR 氏	昔は独裁的であり強制的であった

表 6.6.9.を見ると、昔は住民のほとんどが強制的に村の活動に参加させられていたが、今は強制的に住民を地域活動に参加させられないことが分かった。昔は人数も多かったこともあり、中村の地域限定で中村共盛会という村の若者が集められたグループがあった。その、中村共盛会の勢いは強く、中村の若者は強制的にそのグループに参加させられ、現在の例大祭の前夜祭などの地域活動を仕切っていた。しかし、大井沢の人口が減るとともに中村地区の住民だけでなく大井沢全体の住民が「共盛会」に参加可能になったが、現在は昔ほどの強制力はなくなり、やれる人がやるという形になっている。また、共盛会以外に、3 代前の区長を務めていた SO 氏の政権の時は、SO 氏の発言力はとても強く、そして、決断力もあったことから、地域の人もみんな地域活動に参加していたという。決断力に優れ、周りを引っ張っていくリーダー的存在は現在の大井沢の地域活動においてはおらず、今大井沢に必要な人はそういう力を持った人かもしれない。

6．7．まとめ

6．7．1．大井沢という地域

6.6.1.～6.6.2.の調査結果から大井沢という地域は、雪がとても多い事や、コンビニから凄く離れていて生活が大変な地域である。しかし、それは大井沢の良さでもあることを大井沢に住む住民は語っていた。大井沢は中途半端な田舎でないことは、地理的なことや、環境、残っている文化が教えてくれる。例えば、先ほども言ったコンビニも車で 20 分以上かかりコンビニエンスではなく、毎年冬には積雪 2m越えして雪下ろしや除雪が大変であること、そして昔から残る伝統的なお祭り（風祭、霜祭り）などがある。これだけを言うと悪いところしか見えないかもしれないが、しかし買い物に行くのも、少し考え方を変えてピクニックのついでに買い物をしようという風にすれば、さほど外に行くことが負担に感じなくなるようだ。また、大井沢は自然に恵まれ、その四季折々の姿は移住者だけでなく、大井沢にずっといる地元住民も感動させるほどのものである。それは大井沢にいるから見られる姿である。

他にも大井沢の人の良さも田舎らしさを強める要因の 1 つではないだろうか。7.6. 1. で地元住民のつながりの強さゆえに移住者がよそ者意識を強めてしまうのではないかといったが、しかし、地元住民の人は実際そこまで移住者の「よそ者」という事を意識していないようだった。特に田舎活をやっている大井沢の若い人たちはそうであるように、さほど移住者がよそ者ということは意識していない。ただそれは高齢者になれば別の話であり、高齢者は移住者の事をよそ者と意識してしまうところがあることが分かった。また、地域の人は言い方は少し悪いが、この先今の高齢者が減っていけば少しはよそ者意識がうすまるのではないかという指摘もあった。

以上により、大井沢という地域は生半可な田舎ではなく、生活をするのが厳しいけども、それでも他に負けない良さを持っている田舎であるということが分かる。

６．７．２．田舎活という活動

田舎活という活動について調査をして、一応住民全員が「田舎活」という活動をやっていることは知っていた。しかし、知っている内容は人によりバラつきがあり、またその知っている内容のバラつきからなのか、田舎活に求めることも本来田舎活が行うことから少しずれているものもあった。また、そうしたバラつきは今後の田舎活を行う上での課題になってくるのではないだろうか。そのあたりに関しては次の考察のところで詳しく説明したい。

また、大井沢の地域において田舎活という活動は住民たちの間で、反対されていることはないが、しかし肯定的にとらえていることも少ないことが分かった。それは、活動のやり方についてそれぞれが疑問をもっているからであった。肯定的にとらえていないからといって、大井沢のことがどうでもいいと思っていることではないと考える。

６．７．３．地域のまとまり

大井沢という地域は昔から地域活動が盛んであるということはいろんな人から話しをうかがった。しかし、そうした盛んであった昔と、少しずつ廃れ行く地域活動では何が違ってきているのかというと、地域を引っ張っていくリーダー的な存在が現在はいないことである。今と昔の違いとして、昔は地域活動を行っていた中村共勢会の強制力が強く、NO とはいえずに半強制的に参加しなければいけなかった事、また、区長の権限がとても強く住民をしっかりと引っ張っていく強さがあったこと。今はどちらもない。住民が減ってきたことも原因の１つではあるが、それも含めた上でこれからの地域活動の方針を見直していく必要があると言える。

６．８．考察

今回の調査を行い、田舎活という地域ブランド化活動での課題点や、地域活動での学生側の在り方について考えることが多かった。まず田舎活についてだが、この調査で住民が田舎活の活動に求めているものと、田舎活の目的が住民とメンバーでのズレができていることだ。一応活動は知っているけどということが多いのではないのかということが分かった。中途半端に住民が田舎活を理解したままにすれば、この先、「田舎活って移住のためのものでしょ？」「なんで～～はやらないの？」といったような指摘をうけ、住民から田舎活という活動の理解が得られづらくなるのではないかと考える。そうなった時、田舎活という活動はやりづらくなると考え、早いうちに住民にちゃんと田舎活という活動はどういった目的をもって、こういったことをやっていますと説明しズレをなくす必要があると考えられる。

また、田舎活という活動を通して、大井沢という地域と外の地域が繋がるようになったことがわかった。それは、今回、大井沢出身の GM 氏の存在のおかげではないかと考える。理由は、手探りで外の地域というより、まずきっかけとなる人の存在がいたからこそ目標を決めて活動をすることが出来ていたと考えるためである。そうした、GM 氏のおかげでつながった中と外の繋がりは、これからのモチベーションをあげる１つの要因になるのではないだろうか。TT 氏の指摘で、東京だけでなく他の都市にも視野を広げてみてはどうかというのがあった。これから、田舎活メンバーの知人などをきっかけに、少しず外とのつつながりを広げ大井沢という地域を発信していけばよいだろう。

次に、地域活動での学生ボランティアの在り方についてだが、現時点で学生がイベントに参加しないと存続が難しいという意見がある。そうしたうえで、学生ボランティアの意義を見直したい。学生ボランティアがいることによるメリットは、労力や、活気などがあげられる。しかし、今までそこに集中しすぎていて、学生ボランティアがいることのデメリットを考えてはこなかった。今回の調査により、地域活動に学生が参加しすぎることで、住民の地域活動の存続の危機を感じるのを妨げていることが分かった。これは、非常に深刻な事態ではないかと考える。本来地域の人達のイベントを手伝うために学生が参加したものの、それが、学生たちのイベントに変わっていたら本末転倒である。また、それは地域

の人達の危機感の低下にもつながる。そのため、これからは学生たちのボランティアの参加方法も考えていく必要が十分にあると考えられる。
以上を踏まえた上で今回の調査を通してみつかった３つの課題を以下で紹介したい。

６．８．１．田舎活の認知について

今回の調査を通して、田舎活の活動内容についての認知が人によってだいぶ違うことが分かった。OK 氏の言葉で「町でしていることと、町がしてほしいことは必ずしも＝でない」というのがある。今の田舎活の現状はまさにそれであると思う。そうした、田舎活のメンバーと地域住民のギャップと、田舎活の発信する情報と外が求める情報のギャップを埋めるために、早いうちに活動内容の理解の一致と、大井沢という地域の良さを見直すことが今後の課題である。また、その課題を解決するためにも、今の田舎活の活動内容を改める必要があるかもしれない

６．８．２．現在の田舎活の SNS の活用方法について

現在、田舎活の SNS は Facebook とインスタグラムの二つがある。これらのアカウントは、イベントごとにしか更新されず、地域の情報発信のはずなのに、なかなか地域の情報を発信できていない状態にある。移住促進を進めるうえで、この田舎活という活動は、まず大井沢という地域を知ってもらうためのものであるなら、非日常的なイベントおきではなく、日常的な大井沢、何気ない大井沢を発信していくべきであると考える。
移住促進の活動を進めるうえで、大井沢の良い面だけを伝えることは簡単かもしれないが、本当に大井沢に住みたいと、定住したいと思う人を作りたいのであれば、ありのままの大井沢の現状や状態を伝えるべきだと考える。例えば冬が厳しいことや、地区費が高いことなども言うべきではないかと思う。そうしないと、いざ地域に来た時のギャップで、地域に定住してもらうのは難しいと考える。
なので、これからの大井沢の SNS を活用するにあたって、もっとありのままの大井沢の状態を定期的に情報発信していく必要がある。

６．８．３．地域活動に参加する学生の在り方について

今回地域活動に関しての質問をしたときに、私たち学生に対しての意見があった。それは、地域活動をするにあたり学生がボランティアとして参加することによる影響についてであった。単純に人手が足りないから参加していて感謝されるところもあるが、逆に学生が入りすぎてしまったことにより、地域住民間の危機感を薄くする原因にもなっていることが分かった。地域住民の高齢化と学生の若さという力が、地域住民の学生任せにしてしまう要因になり今では学生なしではイベントが成立しないという声もある。伝統的なものを残していくには、今イベントに参加していない地域住民の参加も必要不可欠であるが、学生たちの力も必要不可欠である。そのためにも、学生と住民が一緒になって活動できる方法を考えていくことが今後の課題であると考える。

６．９．結論

近年農村空間が１つの商品として見られるようになった。今までは農村が作った産物が消費の対象であったが、最近では農業体験や観光などによる農村村空間での体験などの農村空間そのものが消費の対象となってきている。またそうした農村空間を地元住民やその地域に関わる人がイメージ化することを地域ブランド化と言われている。そして、今回の調査地である大井沢地区では、平成 28 年度より、「大井沢パートナーシップ推進プロジェクト」という大井沢の住民と都市部の大学などが連携して行う地域づくり活動が始まった。その活動の中で「田舎活（いなかつ）」という造語を作り、その言葉を中心に、外の地域の人に向けて大井沢のことを知ってもらうために、大井沢の情報を発信する取組みを行

っている。こうした「田舎活」というかたちで大井沢を１つの商品としてブランド化している活動により、大井沢地区でどのような影響を与えているのか。また、その活動に対して住民はどのように捉え、今後の大井沢地区において「田舎活」はどのように活動をしていったらよいのかを明らかにしたい。

以上の目的をもって、２つの先行研究を紹介したい。1 つ目は農村空間に対してのまなざしについてである。現在の農村空間に対して外部団体から向けられるまなざしには 2 種類あり、「消費的なまなざし」と「政策的なまなざし」である。消費的なまなざしは、人間性を回復する《いなか》として見るまなざしであり、政策的なまなざしは危機に瀕する《農村》としてのまなざしである。こうした 2 つのまなざしが現在あることを立川氏は議論している。2 つ目の先行研究は、農村空間を商品化することによる影響についてである。農村空間が商品化し消費者が増えることは農村のアイデンティティの形成に繋がるという議論と、農村空間の商品化することにより地域の魅力を高め移住促進に繋がったり、外との世界との繋がりを増やす可能性があるという議論の２つがある。以上の先行研究をもとに次のような調査課題を設定した。

まず、農村空間を商品化しようとする動きには、農村の地域アイデンティティの形成や、外とのつながりを広げることなどの効果があることがわかった。また、そうした活動において地域内外住民の協力が必要不可欠である。では、大井沢で行われているその「田舎活」という活動は地域住民の中でどれだけ認知されていて、どのように捉えているのだろうか。そして、「田舎活」という移住促進の活動をするにあたり、活動メンバーはどのような思い出やっているのかを明らかにしたい。最後に、実際に活動を行ってみて、地域アイデンティティの形成につながったのか。また、その活動により地域内で変化は起きたのかを明らかにしたい。

調査課題をもとに次のような仮説を立てた。住民の認知については、「田舎活」という活動に対し全員が肯定的捉えてはいないと考えられる。その理由は「田舎活」の活動内容などの中身に疑問を抱いているため肯定的なれないのであると考えた。次に、活動メンバーの思いと活動を通しての変化については、活動通してメンバー内での関係が密になってきているのではないかと考える。また、そうした活動をすることにより、地域を改めて見つめなおし地域の課題発見、そして課題改善に繋がっているのではないかと考えた。

以上の仮説をもとに調査を行って次の３つのことが分かった。まず、地域住民の全員が「田舎活」という活動を知っており、行っていること自体は肯定的であるが、活動内容については否定的である人が多かったこと。否定的になってしまう理由は、まず何を行っているのかよく分からない、目標が見えない、移住促進と言いながら、活動内容はポスターやチラシ作りそして、SNS を使った情報発信だけであり、しかもその情報発信もちゃんとしておらず、情報発信の責任者が見えないとか、移住にちゃんと繋がる活動なのかなどの、疑問であった。また、この調査から、田舎活という活動は知っているけど、何を行っているのかよく分かっていない、また何を目的にしているのかを知らないため、「田舎活」の活動に求めるものが本来の活動から逸れている人もいた。本来この「田舎活」という活動は、移住促進と言いながらも、まずは大井沢の事を知ってもらうことがこの活動のねらいである。しかし、移住促進といっているため、この活動で住居や職を用意することが必要なんじゃないかという意見があり、この活動からずれて解釈している人がいることがわかった。こうした、住民と活動メンバーでの意識差をしっかりと合わせることがこれからのこの活動の課題であると考える。

次に分かったのは、この活動を通して活動メンバー内の関係が密になってきており、また外との交流、つながりが広がった事である。今回この活動を通して、連携している大学やまた大井沢出身の GM 氏が経営しているお店のスタッフをはじめ色んな人と関わりながら活動を行ってきた。そうしたつながりは大井沢のモチベーション向上につながってきているのではないかと考える。またこの繋がりからもっと多くの外の世界と繋がっていくことが今後の課題であると考える。そうした繋がりから大井沢にい移住してくる人も少しは増えるのではないだろうか。

最後にこの調査で分かったことは、学生スタッフの存在についてである。この調査では本来「田舎活」をメインに調査していたのだが、調査をしていくうえで、田舎活と大井沢で行っている他の地域活動の比較も必要なのではないかと考え調査していたところ分かった事である。現在、田舎活でもそうだが学生スタッフも交えながら活動しており、他の地域イベントでも地元の住民と一緒になって学生も参加している。学生が参加する理由は労力や活気づくりなどが挙げられるが、しかしそうした参加をすることにより、地元住民のイベント継続の危機感を削いでしまっていることが分かった。大井沢雪まつりから学生スタッフが参加するようになり、イベントも人手が足りなければ学生を頼ればいいという安心感から、地元住民がイベントに参加しづらくなり、また活動が難しくなってきている。本来地元住民が主体のイベントのはずなのに、学生が参加し続けることにより学生主体のイベントとなってしまっていることが分かった。こうした問題から、今起きている学生スタッフのイベントに参加する態度も考えていくことが重要なのではないかと考える。

【参考文献】

高柳長直、ドウエミ、木村健斗、竹内重吉、2017 年、『六次産業化と農村空間の商品化』、公益社団法人 日本地理学会、『日本地学会発表要旨集』、2017 年度日本地理学会春季学術大会

立川雅司、2005 年、『消費される農村―ポスト生産主義下の「新たな農村問題」』、農山漁村文化協会

田原潤一, 後藤 春彦, 佐久間 康富、2008 年、「特産物の地域ブランド化の現状と地域への影響に関する研究―商標登録済みの水産物を対象として―」、日本建築学会、『日本建築学会計画系論文集』7 3 巻 625 号、pp.565－572

７．山村地域での高齢者の日常における交通手段のあり方について
－交通相互支援と免許返納の困難－

丹野朱果 ※

７．１．はじめに

本調査は、社会調査実習の授業の一環の調査であるが、本章のテーマは、私自身のライフヒストリーと密接なつながりがある。というのも、私の生まれは福島の田舎であった。そして、大学に入学するまでの18 年間の田舎生活においては、常に移動による不便さを感じていた。私の住んでいた福島の片田舎においては、電車もバスも都市部に比べて充実していない。いや、充実していないどころか都市部の生活者が想像できないほど本数も少なく、次々に廃線となっている。これは、大人の殆どが自家用車での移動をしており、移動といえば車であることがあたりまえだからだ。免許が取得できる年齢になれば、高校生のうちに免許を取りにいくことは当たり前で、多くの友人は高校卒業時、就職記念等で親から車を買ってもらっていた。各家庭には一人一台かそれ以上の台数の車があり、誰もが車を使うのが当たり前であった。

その結果、いわゆる交通弱者―まだ運転免許を取得できる年齢に満ちてない学生や自分で運転することを困難とした高齢者―は、自由な移動を制限される。車が運転できる世代にとっては殆ど意識されないが、高校生までの子供と車を使わない高齢者は、移動で様々な苦労を経験する。子どもであれば、家から出かけるときは、常に親などの送迎をお願いしなければならないし、高齢者も買い物や通院、娯楽など集落外に行く際は、常に移動手段について気を遣わなければならない。特に、私の住む福島の片田舎は、日本の山村の多くがそうであるように高齢化が進行していることもあり問題は深刻化する一方である。

こうした点を踏まえ、本稿においては、対象地である大井沢において、高齢者の交通手段はどうなっているのか。そこに、課題はあるのか。そして、課題があるとすれば、それはどのように克服されていないのか。以上の点を明らかにしてきたいと考える。

近年、高齢者のアクセルブレーキの踏み間違え等による悲惨な事故が多数報道されている。それにより、高齢者の運転について、世間から今までより一層厳しい審査を導入したり、一定の年齢を超えた時点で運転免許証の返納をの返納を強制してほしいという声があげられている。また、このような声を背景に、高齢者の運転免許証制度の見直しを求める声も見られるようになっている。このような現状を踏まえ、公共交通縮小し、高齢者があたりまえに運転している農村地域において、仮に運転免許制度が変わり高齢者の免許返納が義務づけられるなど運転する権利を失ってしまった場合、どのようなことが予測されるだろうか。本調査では、特にこの点に注目して、分析を進めていきたい。

７．２．先行研究の整理

まず、山村地域の交通環境、目的による実際の交通手段について、先行研究を整理する。山村地域の交通手段と目的についてそれぞれ項目に沿った内容で、北島氏は、島根県邑智郡を例にして次のように述べている。

> 公共交通機関は次の３つに分類される。1）国民の足として不可決である交通機関、2）輸送サービスを供給する経済主体が公企業である交通機関、３） 公・私企業を問わずというものである。それらによって供給される輸送サービスを不特定多数の公衆、利用可能である交通機関、筆者は 3）の定義に従い， 鉄道（ここでは三江線）・バ ス・タクシーを公共交通機関とし、その他を自家用交通機関とする。そして４つの交通目的をあげ、それぞれ利用交通手段を分析する。（北島修、1982、 p.28）

この地域では鉄道の手段が存在し、それぞれの目的を持った交通手段に対してどのような違いがある中種類別に分析している。それぞれの内容を、詳しく見ていこう。

①通勤交通。自家用交通機関の自家用車は 59.5%、原付・オートバイと自転車 8.0%、送迎車　7.5%、

※ 跡見学園女子大学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科３年

近所の人や知人の車は 4.8%。公共交通機関では、乗合バス 2.8%、国鉄　2.4%と低率。このことからわかるように、自家用車の利用が圧倒的に多い。また、送迎車・近所の人や知人の車の便乗利用の割合が比較的高い。次に自家用車所有世帯。近所の人や知人の車の利用 3.3%、送迎車 5. 6%。その対照的に自家用車非所得世帯では、近所の人や知人の車の利用は 13.3%、送迎車は 20.0%。自家用車非所有世帯では、自家用車に代わる交通機関の依存が強く、過疎地域における自家用交通機関偏重の傾向がより明確に現れている。②通学交通。この手段では、公共交通機関の利用が主である。国鉄 33.6%　乗合バス 17.3%、自転車 20.3%。国鉄三江線利用の可能性の大きさがその主要な選択要因となっていることがわかる。スクールバスは本調査では利用者は少なかった。乗合バスは地区・時間帯によってスクールバスかされている。自家用交通機関では、自家用車・近所の人や知人の車が相当数通学交通にも利用されていて、これは過疎地域の交通事情の一つでもある。自家用車の利用は 7.4%であった。これは、通学目的地が家族の通勤目的地に近接していたり、途中にある場合は便乗する現状が読み取れる。通学交通は通勤と同様、需要者の時間制約が大きいため、公共交通機関が十分なサービスを提供しない場合、代価絵交通手段を探さざるをえない。（北島修、1982、 p .28）

以上を踏まえると、通勤・通学では交通手段が異なっていることがわかる。通勤も通学も毎日欠かせない交通手段であるが、各々交通手段は異なった。背景には年齢が関係していると考えられる。

③通院交通。国鉄の利用が最も多い 41.7%。自家用車 25.0%。乗合バス 12.5%。自転車 8.6%。全通院交通を年齢別に分類すると４０才以上の中高年齢層が大半であった。国鉄・乗合バス・タクシーなど公共交通機関の利用を主としていてタクシーの利用は目的別により最も多い値である。④買物交通。自家用 42.1%。国鉄 12.3%。乗合バス　7.0%。公共交通機関の割合が比較的高く、通勤交通や通学交通ほどパターンが画一化していない。日用品から奢侈品までさまざまであり、その買物の性格により目的地や利用交通や手段は異なるそのため、徒歩、自転車という近距離用交通手段の利用も少なくない。（北島修、1982、 p .28）

通院に対しても一番は公共交通を利用することがわかった。また、その内容によっても交通手段が変わり、定期的に行う交通手段の中にもその場の状況によって異なるものであることがわかる。

上記の先行研究からもわかる通り、過疎地域における車での交通手段は必須だといえることがわかる。また、交通の目的によっても手段が変わってくることがわかる。中には近所の人や知人の車を利用というケースもある。このような地域では、近所とのかかわりも強く、協力という形で交通を補うことができる。以上を踏まえると、やはり、山村地域での交通においては、高齢者でも免許返納をすることは難しいのではないかという考えになる。

一方で、実際に高齢者の車の運転事故の事例にはどのようなものがあるのかについて、NPO 法人、 高齢者安全運転支援研究会の調査から考えてみよう。

群馬県の関越道でお盆のさなか家族を乗せた男性運転手（40 歳代）が前を見ると逆走してくる軽トラック、とっさにハンドルを切って回避。男性の車はスピンして中央分離帯と他の車に衝突してストップ、すぐに煙が充満するが脱出には時間を要した、やっと子供が脱出できたその直後に一気に炎上。軽傷だったものの子供たちは死の恐怖から精神的ショックを受け夜も眠れなくなってしまう。事故原因の軽トラックは、そのまま走り去り 3 日後に警察の捜査で運転者の男性（75 歳）が判明。男性は取り調べに対して「覚えていない」と答える。翌日男性は認知症と診断され免許を取り消される。〈NPO 法人　高齢者安全運転支援研究会 HP より〉

こうした高齢者の事故は、各地で報告されている。また、交通事故全体に占める高齢者が関与した事故の割合も、2007（平成 19）年の 13.1%から 2016（平成 28）年には 22.3%と急増している。もちろん、社会全体の高齢化の影響により、高齢者の事故数も割合も増加しているといった側面もあるが、実際の事故内容を確認すると、高齢化による認知機能の低下等を原因としていると思われるものも多い。これを踏まえると、やはり何等かの対策というものが必要であると言わざるを得ない。

以上、先行研究をまとめると、目的別交通手段から圧倒的に車の利用がほとんどであることがわかる。調査にあたり、この記載されている事例以外にも多くの高齢者交通の実例が存在する。過疎地域のような近所とのかかわりが深く、近所や知人の車を利用できる地域は当事者である高齢者の免許返納の抵抗があっても、事故が起こるより、対処すべきであるようなことがわかる。このような高齢者運転の現状も実際には存在するが、高齢者の事故はこれからより交通に対して考えなければならないことなのか。

７．３．調査課題

以上の先行研究を踏まえ、本調査においては、以下の点を調査課題として設定した。

先に指摘したように、現在、世間では高齢者運転者による交通事故が増えている。その上で高齢者の免許返納が検討されつつある。しかし、地方においては生活する上で車は不可欠なものとなっている。そこで調査課題として、まず、山村地域の大井沢における交通利用の実態を明らかにしたい。ほかの山村部と同じように自家用車での運転が多いのか、又、その目的とは一体どんなものがあげられ、目的によって交通手段にどんな影響があるのだろうか。山村地域のような近所の方々とつながりが深い地域では近所の方々が交通をサポートしているケースは大井沢ではどのようなものなのか。

また、将来的には、高齢者が更に増え、現在以上に高齢者ドライバーが増加することが予想される。現在の高齢者の事故率のまま推移すれば、高齢者の事故数も増加し、これまで以上に高齢者に対して免許返納を求める声が強くなることも予想される。そうなった場合、免許制度はどのようになるのだろうか。また、免許返納について、そもそも当事者の高齢者はどのようなことを考えているのか。高齢者運転による交通事故の自らの高齢化に伴う交通事故リスクの増加という問題に対して、免許制度の在り方の観点から高齢者の考えに迫りたい。

７．４．仮説

上述の調査課題について、以下の 3 つの仮説を立て検証したい。

今回の調査地である山形県西川町大井沢は、過疎山村地域であり、公共交通が貧弱である。町営バスが町中心部から出ているが、日に 10 便未満程度の必要最低限な本数に限られているなどあるが、過疎地域であるため、利用する人は少ない。過疎地域であり、人数も少ないため、限定された通学時などの時間帯に偏ったバスの運行時間や目的地までの距離が長く、買い物や通院の基本的な目的でもタクシーなどを使った場合、交通費がかかる。その為、やはり高齢者であっても自動車を所有し続ける人が多く、高齢化が進む山村地域においては、結果として高齢者が運転することが増えているのではないだろうか。

第二の仮説は、公共交通が不十分であることから、日用品の買い物を毎日するのではなく、週に一度等、まとめて買っているのではないか。

第三の仮説は、高齢化社会における協働という観点からのものである。現在、日本全体で高齢化が進み、高齢者の一人暮らしや高齢者夫婦のみの世帯も存在する。。今回の調査地である山形県西川町大井沢は、そうした過疎高齢化が特に進む山村集落あることから、こうした高齢単独世帯・高齢夫婦のみ世帯が多いことが想定される。こうしたなかで、移動や生活で困難を感じる場合、どのようなことが想定できるだろうか。これに関しては、一般的に、農村部のほうが近所づきあいが親密で、関係性が濃密であるという指摘が多々ある。ここから、今回の仮説として、移動の困難について、お互い近所の人や知人によって助け合い、協力し合う形で移動を可能にしているケースもあるのではないかということを設定したい

以上を仮説に、調査を実施した。調査は 2017 年 9 月 4 日～10 日にかけて、テーマにかかわる関係者 13 名にインタビュー形式で行った。なお、インタビューは一人あたり 60 分程度実施したが、対象者の都合により一部は 120 分に至ったものもある。また、調査の一環で、9 月 9 日の例大祭前夜祭および 9 月 10 日の例大祭に参加し、地域の方々とふれあいながらインフォーマル・インタビューを実施した。

７．５．調査結果の概要

調査データの分析に先んじて、まず、調査概要を簡単に紹介したい。大井沢では、自動車、バス、タク

シーなど、利用できる交通手段の種類は多いが、実際に使われているのは、ほとんどの場合、自動車であた。高齢者の通院に関しては、行きは自動車、帰りはバスと手段目的や生活事情により手段を分けている。あるいは、タクシーやバスを組み合わせて移動することもある。日用品の買い物は、週に一度の移動販売に頼り、高齢者が移動して買い物する機会は少なかった。また、近隣での交通支援は存在するが、それほど多くはない様子であった。また、交通面での支援を頼む際も、緊急の際はリスクが高いために他人は対応できなかったり、通院以外の娯楽の場合は気を遣い、あまり頼ることが出来ないこともあり、免許がないことは高齢者の生活の不便に直結することがわかった。これらのことから高齢者の免許返納は難しいと考えられる。

７．６．分析

７．６．１．山村地域の自家用車事情と高齢者による事故についての考え

高齢化が深刻する山形県西川町大井沢では、先行研究同様に高齢者の運転免許証所持、高齢者による運転が多くみられると考えられる。そこでその現状はどのようなものか。まず、自家用車についての現状はどのようなものか調査した。

表７．６．１．山村地域の自家用車環境について

対象者	運転免許証	自家用車	高齢者事故について	免許返納について
DR 氏	所持	所持	問題あり	少し反対
YK 氏	所持	所持	問題なし	反対
DH 氏	所持	所持	多少問題あり	賛成
DY 氏	所持	所持	問題なし	反対
OK 氏	所持	所持	問題なし	賛成
SO 氏	所持	なし	多少問題あり	少し反対
DT 氏	所持	なし	問題あり	どちらともいえない

以上のデータ大井沢に住む高齢者７名にインタビューをしたところ、表７．６．１．のような結果となった。これによると、全員が運転免許証を保持し、また、ほとんどの住人が一人一台自動車を保持していることがわかった。また、高齢者の事故については、次のような意見が聞かれた

高齢者の事故が多いっていうけどよ、人口的に高齢者が多いんだからよ、それでは多くなるんじゃないかと思うんだけどよ。（DY 氏インタビューより）

つまり、高齢者の数が全体的に多くなったことによって今まで出てこなかった高齢者の事故が見えてくるような感がするだけという意見である。反対に高齢者の中には、テレビのニュースなどで高齢者の交通事故の特集なども最近では多くみられることもあったため、高齢者の交通事故による危険という認識も多く持っている住人も少なくない。しかし生活習慣から交通の便が悪く、自動車を手放せないというのが現実にある。結果、高齢者の交通事故に対する問題意識がある人もいるが、実際に返納している人は少ない。また、高齢者が多くなっているこの時代に高齢者の事故が多くなっていることは、不思議なことではない、という意見もあった。調べていくと、騒がれてはいるが、日本全体の交通事故の割合は高齢者にかかわらず、どの年代にも多くあることがわかる。これらのことから世間の流れにより、高齢者の運転は危険と騒がれていることもあるため、高齢者事故について問題は持っているが、実際の生活の現状を考えるとやはり免許返納は反対という意見が多数存在することがわかる。

７．６．２．交通目的とその手段について

先行研究により、目的によって移動の手段をかえていることがわかった。山形県西川町大井沢では、山村地域で交通手段や買い物対象の場所が集落内にないため、集落外の目的地に、どのようなものがあるか調査した。

表７．６．２．利用目的と利用手段

対象者	利用目的	移動手段
DR 氏	会社、送り迎え	自家用車
YK 氏	娯楽	自家用車
DH 氏	娯楽、病院	自家用車
DY 氏	娯楽、仕事、病院	自家用車
SM 氏	移動全般、買い物（移動販売）	自家用車
SO 氏	娯楽、仕事、病院	バス、タクシー
DT 氏	娯楽、通学（学生時代）	親の送迎、徒歩、バス

表７．６．２．にまとめたとおり、大井沢における交通手段を使う際の利用目的としては通勤、娯楽、出勤、そして学生の場合は通学があげられた。表にまとめたもの以外にも、農家をしている家では、自分の畑へ行く際でも自家用車を使い移動しているという話もあった。先行研究で多く指摘されていた為、大井沢でも交通手段の利用目的に買い物があると思われたが、日用品の買い物を挙げた対象者がいなかった。これは、大井沢には、週１回生協の移動販売が来るため、そこで日用品をまとめて買い、まかなっているからであると考えらえる。移動をして、スーパーで買い物をするのは、あまり多くない。高齢者ほど、あまり移動をしない移動販売を利用する人が多くみられる。

生協があるんだ。週一回。あとね、うちではあんま買わないけど、セブンイレブンも販売車みたいなのも来るし、うちのお得意さん、うちはここで買うんだみたいな、何か決まってんのよね。だからそういうのを利用して、ちょこちょこ小人数だからね、二人とか三人とかだからそこで買うと思います。私なんかやっぱまだ出かける機会もあるんで、そのときにだから一緒に食料を買ったり、それまでは何とか冷凍品とじゅん野菜で済まそうとか、そういう感じで。（SM 氏インタビューより）

生協から買ったりするときもあります。冬とかはね、特にね。冬は、わざわざ吹雪のときなんかでかけねえではとか、というのもあるんで。こっから出かけるとよ、寒河江ダム辺り、あそこらへん、すごい見えなくなったりするときがあるのよ。だからおっかないし、出かけるにも寒河江まで行って往復で２時間くらい、んで買い物とかして１、２時間かかるわけだからね、だから半日くらいかかっちゃう。（SM 氏のインタビューより）

冬は特に移動が困難なため、移動販売を利用することが増える。通院については、ある程度元気な場合は西川町役場支所で行われている月に一度の出張診療で血圧を測ったり、そこで薬をもらっている。表で挙げた対象者にはいないが、一人暮らしの病院に通う人は、行きは近所の方に送ってもらったりタクシーで向かい、帰りは時間も気にしないのでバスで帰っているケースもあった。学生は、スクールバスを主に利用している。しかし高校生になると、通学費用を考え一人暮らしをし、そこから通う方が年間を通してお金がかからないため、親と離れて暮らす子供も少なくない。そのため、スクールバスは中学生までが利用することが多いようである。

７．６．３．大井沢の交通手段状況

ところで、大井沢の自家用車以外の交通の手段にはどのようなものがあるのだろうか。インタビューデータを表７．６．３．１．にまとめてみた。

表７．６．３．１．交通手段とその現状

移動手段	時間帯	利用者数	利用者	料金
タクシー	朝から夜	減少傾向	高齢者	基本 690 円
大型タクシー	朝から夜	減少傾向	飲み会の若者	920 円
介護タクシー	朝から夕方	月 15 人くらい	心身障害者	690 円
フリー区間バス	朝から夕方	10 未満	高齢者	1 駅 200 円
スクールバス	朝から夕方が主	15 人ほど	学生＋高齢者	1 駅 200 円

これによると、フリー区間バスと呼ばれる、一定の区間を走る間はバス停等はなく、各所で利用したい人が手をあげてバスに乗るというバスが存在する。

ここの大井沢だけね。フリーバスっていって乗りたい時に乗って、降りたい時に降りる。そういったバスがある。 これは便利だ。そして帰りはバス乗って大体帰ってくるんだな。（DH 氏インタビューにて）

言えば姥沢、月山に行く路線、ここの区間は月山に行くわけだ、バスストップっていうのは。だと例えば西川バスストップから月山まで出発してゆめはり当たりで手をあげる人がいれば乗せると。ただ区間がフリーになっている。まず、ほとんどいないですけどね。 （月山観光タクシー株式会社インタビューにて）

村の方々のインタビューでは、このバスについて便利という意見が多数あげられていたが、バス運営会社へインタビューを行った結果、実際の利用者は限りなく 0 に等しいことがわかった。表にあげた以外に、貸切の大型バスが利用されることがあるが、地区主催のイベント等で大人数がいる場合に限られる。町内に深夜まで営業している飲食店もないため、バスの運行も遅くても 21 時までとなっている。また、タクシー会社も遅くても 22 時 10 分には営業が終わる。それぞれの交通手段における利用時間は、朝の登校や高齢者は午前中に行動が多いため、朝、午前中が主とのことである。

こうした自家用車以外の交通手段を運営する団体に対して、免許返納に伴って返納者に何等かの支援等（行政が実施しているものを含む）があるのかを聞いた。それをまとめたのが、表２．６．３．２．である。

表―７．６．３．２．免許返納後の各行交通機関の対応について

交通種別	返納後の対応
タクシー	タクシーの 2 万円券
大型タクシー	
介護タクシー	
フリー区間バス	バス回数券 2 万円分
スクールバス	

ここにまとめたように、返納した後の対策として、返納した付き限定でもらえる 2 万円の券がそれぞれある。

タクシーの 2 万円券と町営バス回数券の 2 万円分、これは本人の選択。ま、今までね、田舎であればあるほど、免許返納したら足がなくなる人が多かった。そのため免許返納する人なかなか返納する人もいなかった。けど、町がそういった政策をしたことで、今現在は 8 名くらいいるのかな？タクシーを選択した人が。（月山観光タクシー株式会社インタビューにて）

この制度が導入されるまでは返納者が 0 であった。では、この制度が導入後免許返納者が劇的に増えたかというと、そうでもないらしい。それは、主な利用場所であるスーパーや病院、学校までは距離が遠いため、日常的に使えば 2 万円の券もすぐなくなってしまうからである。2 万円の券をもらうよりも自家用車を自分で運転したほうが安く済む。結果、免許を返納する人は少ないままに留まっているのだ。

７．６．４．山村地域の交通目的と運転者の関係

山村地域の高齢者は主にどんな目的で移動するのか。また、どのような交通手段のニーズがあり、そこに地域の方々のどんなサポートが存在するのか調査をしてみた。

表７．６．４．によると、大体本人が自分の車を好きな時に運転をし、移動する。しかしイベントごとなどでくさんの方々が同じ場所に移動する際は、まとまって町の若者が運転手となって送迎を行うことがある。これについては、以下のような話があった。

表７．６．４．交通目的と運転者

対象者	目的	自動車運転者
DR 氏	移動目的全般	本人
YK 氏	移動目的全般	本人
DH 氏	町のイベント	本人（きららクラブで他の人の送迎車）
DY 氏	移動目的全般	本人
SM 氏	移動目的全般、家族の通院	本人が家族の運転者
SO 氏	移動目的全般	近所の方々
DT 氏	移動目的全般	親

頼みやすい人さ、乗せてけろっていってますね。だから大井沢支所に行きたいにしても、歩くのも大変だから、乗せてけろって頼んだりね、用事あるとき。役場に行ってもいいんだけど、町営バスでいかねえからね。町営バスって２００円なんですよ。だから安いしね往復しても４００円だから。でも時間もほらないからあんまね。（SM 氏インタビューから）

交通手段に対して交通費余蘊の面はいいと認めているが、時間にしばられ自由に行き来できないことから地域住民に頼むということが読み取れる。

あとな、バスっていうのもあるんだけんども、子供の送り迎えは普段できない会話を密室の空間である車ですることによっていいコミュニケーションになるんだ。（DR 氏インタビューより）

家族がいる世帯は、その中で若いものが代わりに運転をし、送迎する。小・中・高校生がいる家では、親が送迎する。バスもあるが、ちょうどいい距離と時間を保てる学校までの車での親と子の時間がいいコミュニケーションがとれる。その為、あえて親が子供の送迎を行うというケースもある。病院へ行く際、近所の方々と協力して、移動することもある。しかし、何かトラブルで倒れていたり、なくなっていたりという救急な場合は、安易に近所の他人が振れることは許されていない。その為、すぐに対処が出来なかったり、何日もそのままということもある。これにより、このような交通目的に対し、家族内での交通サポートは存在していることがわかる。

７．７．考察

今回の調査の結果、山形県西川町大井沢のような山村地域においては、高齢になっても運転免許を所持し続け、車での移動というものは高齢者の心の活性化にも繋がるということがわかった。

まず、交通手段として利用されるのは、圧倒的に車が多い。他の手段の対象である、バスやタクシーなどその地域の利用者や利用需要時間帯によって工夫はされているが、自家用車で運転することは、自分の好きな時に利用できるため、自家用車の利用が多くある。また、自家用車以外の交通料金を考えると車での利用が安く考えられ、必須になる傾向がみられると考えられる。また、車を使い自力で移動することは、好きな時間帯に、好きな場所へ気兼ねなく移動できるということを意味する。公共交通が脆弱な山村地域において、免許と車は移動の自由を意味するものなのだ。ゆえに、免許を返納させ、高齢者の車での移動という手段を奪ってしまうことは、移動の自立性を奪い、まわりに気を遣わなければならなくなり、結果、移動の機会も減少し、引きこもってしまう高齢者を増やすことを意味するのだ。つまり、高齢者から免許を奪うことは、その地域の高齢者の性格さえも変えてしまうものになる危険性があるのだ。

次に、子供を持つ交通手段として通学などの送迎があるが、自分の子供が学校へ通うという時間は、程よい長さの移動時間であるため、子どもとコミュニケーションを取れる格好の機会となることもわかった。そのために、あえて車を利用するという対象者もおり、こういった面でも車の運転は山村地域でのより良い関係づくりとしても左右する。先行研究で近隣住民との助け合いという協力をする交通手段があった。山村地域では、地域的にも人数も少なく、隣近所同士の私生活もよくわかってしまう。この環境で円満に暮らしていくためには、近隣住民とのコミュニケーションと助け合いがとても重要になってくる。

交通の側面においても、近隣の助け合いの一環で、行事や通院など軽いものであれば、お互い協力しあって、生活していることがわかった。ただし、急病等の緊急時の搬送は、何かあった際の対応が困難なことから、近隣の助けで気軽に移動の支援をすることは難しいということもわかった。

また、日用品の買い物は、移動販売車が地区に来てくれるため、大井沢内で済ませることができるようだ。主な交通目的は病院である。同様に簡単な診療であれば、交通の便が悪い山村の交通手段での高齢者の為、地域の中の支所にて月一回診療所が設けられるなど、目的にあたるものが、その地域に寄り添っているといった工夫がされていることもわかった。

最後に、免許返納後の交通手段の不便さの対策として、タクシーやバスへ乗車する際にチケットを給付するなどの工夫があるが、全体的に交通料金や移動の自由を考えると、圧倒的に免許返納しない方がいいという結論に至ることもわかった。高齢者の事故という問題がメディアで騒がれているが、高齢者の人口が増えているということも考慮する必要があるだろう。しかし、世間で問題視されているということもあり、大井沢に住む当事者の方からは、“地域限定免許“があればいいという提案もある。このことからも地域限定免許は誰にも迷惑のかからないより良い免許制度だと考えられる。

７．８．結論

以上のように、山村地域の交通は、目的によって交通手段は変わってくるが、交通目的はその利用する人によって変わり、地域の活性化にも繋がるものもあることがわかる。

今回は、自分の地元と似た条件であった山形県西川町大井沢は、自分のライフストーリーと重ね、交通に対し不便なのではないか。また、メディアで取り上げられている交通の事故に対する高齢者の免許の見直しが騒がれているため、実際に高齢者免許の見直しが考えられている。ここでの調査目的は、その二つの観点から交通に対し、現在の実際の山村地域の現状とそこからなる地域のあり方、また、実際に免許返納が見直された場合、どのようなことが考えられるかという目的を持ち、調査を行った。

先行研究で他の地域について調べていく中で、交通について目的によって手段が違っていたり、高齢者事故の深刻さや、住む地域の人によって変わることがやはり多くの人が移動手段を車でしていたことがわかった。移動目的は主に通勤や通院や買い物による必要最低限のもの。そしてそのことは一度にまとめて行っているというものがあった。交通弱者は、親密のコミュニティを利用して、隣近所の方々と協力して移動していることもある。また、子供は通学などがあげられた。

このことから車での利用が大半で、その目的にあたることは、まとめていたり最低限の回数で賄うであろうといった仮説を立てた。また、近所の方と関わりが深くなる山村地域では、移動手段の中での協力がみられるため、免許返納による問題については改善されるものがあるのではないかという仮説を立てた。

調査の結果、移動は大半が車で行われており、バスやタクシーもあるが、ほとんどの人が車を一人一台持っており、移動手段目的では、先行研究とは違った買い物は大井沢に逆に来てもらう移動販売を多く利用していたり、通学に対しても高校生になると近くにがこうも少ないため、下宿をしたりという子もいることわかった。通学に合わせてバスを運行していても子供とのコミュニケーションの為、あえて車での移動手段を利用するという車の移動手段の目的も新たにあることがわかった。交通弱者は、隣近所の方々とうまく協力して移動しているというケースもあるが、気を遣いそんなに多くお願いすることもできない。その為、そのような高齢者は外に出るということも少なくなってしまう。これらの分析から、高齢者の交通は、やはり移動手段は車が多い。親密なコミュニティということを利用し助け合い買う通手段もあるが、気を遣ったりという問題があるため、高齢者地域の活性化が下がってしまう。また、地域の特徴によってさまざまな交通の目的の変化や工夫があることがわかった。このことから高齢者の免許改善見直しによるリスクの方が多くみられることがわかる。町の人からの意見でもあった通り、誰もが迷惑のかからないその“地域限定の免許”というものがあるといいと考えるという結果になった。

【参考文献】

北島修、1982、「過疎地域における交通現象と交通機関の機能―鳥取県邑智郡を事例にしてー」『経済地理学年報』28（3）、p. 3

2012　NPO 法人、高齢者安全運転支援研究会、http://sdsd.jp/activity/2012-plan/、2018 年 1 月 30 日